僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

【Ｎコード】
Ｎ４３０７Ｚ

【作者名】
津森太壱。

【あらすじ】
本に夢中になり過ぎて一週間、そろそろ眠らないと身体的にヤバいかなと思っていたノルジスのところに、竜騎士が現われた。命が危ないとその竜騎士に言われ、いつのまにか生命の危機に立たされていたノルジスは、とりあえず話を聞くことにした。

０１　：　トーエイの森の魔術師。（前書き）

はじめましての方も、そうでない方も、読んでみようと思ってくださりありがとうございます。
急に魔王の話が書きたくなって、なんとなく書いてみました。
楽しんでいただけたら、幸いです。

01 ： トーエイの森の魔術師。

新しく作られている街の近くで暮らそうと思ったのは、活気づいている場所だからというわけではない。
なにもかも、新しく始めるのだというところに、自分と同じだという興味が惹かれたからだ。

あちこちで、木を叩く金槌の音が聞こえる。人のかけ声が飛び交っている。少し静かになったときは、職人たちが休憩を兼ねた会議を開いていて、しばらくするとまたさまざまな音が響く。
少しずつ作り上げられていった新興都市は、当初の予定より随分と大きな街になったらしい。最初は僅かだった貿易が盛んになり初めると、商業も発達してくるから、たくさんの人で溢れるようになった。たくさんの人がいるから、街を大きくしなければならなかったのかもしれない。
魔術師を呼ぼう。
誰が最初にそう言ったのか、それはわからない。けれども、大きくなった街は、もっと大きな力を持つ存在を手にしたがった。それが魔術師を呼ぶきっかけになった。
だが、新参の街に、魔術師は来たがらなかった。新しい街というのはなにかと面倒で、厄介なことが多いからだ。希有な存在である魔術師にしてみたら、そんな面倒ごとに首を突っ込むくらいなら国の官吏として一生を安泰して過ごしたほうがいいと考える。
人々は考えた。
繰り返し協議がなされた。

そうして、誰かがまた言った。
トーエイの森に暮らすあの青年、あれは魔術師ではないのか。
新興都市のすぐ近く、トーエイの森には青年がひとりで暮らしていた。その彼が魔術師ではないかと、誰かが言い始めたのだ。
話はあっというまに広がり、ただの憶測でしかなかったそれは確信された話となり、トーエイの森に住む青年は連行されるように新興都市へと引き摺られていった。
しかしながら、その青年は確かに、魔術師だった。それもとびきり優秀な魔術師だ。
魔術師を街へ招くことができた人々は喜んだ。三日三晩、宴を開き続けるほどに喜び勇んだ。
けれども。
とびきり優秀な魔術師は、人々の想像を遥かに超え、あまりにも優秀過ぎた。なにかを作る知恵を求めれば、ぽんとあっさり知識を差し出し、あれが欲しいのだがどうにかならないだろうか、と相談すれば、その場で欲したものを具現化させてみせた。天候がひどいときにはそれを操って回避させ、獣の被害が出ればひとりで対処してみせた。
最初こそ魔術師であった青年を敬っていた人々だったが、その人外の力にだんだんと恐れを抱くようになった。
また誰かが言った。
あれは、魔術師ではない。バケモノだ。悪魔だ。いやきっと魔王だ。
誰かの言葉で、青年は都市を追われることになった。
けっきょく新興都市は、それからは魔術師を迎えることなく、静か年月を重ね古参の都市となった。

眠気を誘う陽気に、あふりと欠伸をする。このまま眠ってしまっても問題はないが、今読んでいる本の続きが気になって、それもできない。

「ノぉールジぃース、お昼だよー」

どこからともなく聞こえてきた遠い声に、また欠伸をする。

「んー……そこらに出しといてー」

返事をすると、強い眠気に負けまいと目を擦りながら、なおも文字を追い続ける。

「ノルジス？　昼食だってば」

今度は近くから声がして、ノルジスは仕方なく本から顔を上げた。

「聞こえてる」
「返事くらいしてよ」
「した」
「聞こえなかった。ほんとに返事したの？」
「したよ」
「ほんとかなぁ……。お昼だよ」
「はいはい」

食欲よりも眠気のほうが優っているのだが、それは許してもらえないだろうなと、ノルジスは読みかけの本に栞を挟んで閉じた。そうすると自然、香ばしい匂いに気づく。

「なんの料理？」

「レヴンがくれたお米が収穫できたから、教わった通り炒めて炊いたの。けっこう上手くできたよ」

「おこめ？」

「稲穂の実だよ。東のほうで育てて る土地があるでしょ？　そこから少し苗を分けてもらったからって、レヴンがくれたの」

「それ、だいぶ前の話と違う？」

「だって育ててたもん。大変だったんだよー」

時間をかけて育てたという稲穂の実が、本日の昼食らしい。さて米とはどんなものだったかな、と首を傾げながら、ノルジスは本を机に置くと椅子を離れた。

食堂に移動し、卓に広がった昼食を見て「おお」と少し驚く。

「美味しそうだね」

匂いからしてそうは思っていたが、見ためからもその雰囲気が伝わってくる料理が並んでいる。

「お米って、炊くとご飯になるんだって。で、レヴンに教わったのは炊き込みご飯。細かく切った野菜と一緒に炒めてから炊いたの」

美味しいはずだよ、と自信ありげに言うので、これは期待できる料理なのだろう。

席について、いただきます、と両手を合わせてから、炊き込みご

飯だという昼食に手をつけた。

「ん。少し塩気が足りない気もするけれど……うん、美味しいね」

「塩はわざと控えたんだよ。でも……控え過ぎたかも」

ちょっと失敗したかな、と落ち込むので、初めてにしては上出来だと褒めておく。

「これ、また食べられる？」

「うん。けっこう収穫できたから、しばらくは食べられるよ。気に入ってくれた？」

「硬い麺麭よりこっちがいい」

「じゃあ頑張る」

今度は上手に作るよ、という言葉に、微笑んだ。

炊き込みご飯を主食にして昼食を終えると、食後のお茶に一息を淹れる。

「そういえば学校はどうした、セヴン？」

「ノルジスが本を読み耽ってる間に試験も終わって、休みに入ったよ」

「おやまあ……僕、どれだけ本に集中してたのかな」

一週間くらいかな、と言うセヴンに、「あら」と顔が引き攣る。どうりで眠気がひどいわけだ。

「眠ってもいいかな？」

「いいけど、三日くらい眠り続けるのはやめてね。寝ぼけてるノルジスに食事させるの、けっこう大変だから」

「眠ってるときに無理やり食事させてるの？」

「だって飢えるでしょ」
「だいじょうぶだよ、三日くらい。一月くらい食べなくても平気だし」
「だめ。身体に悪いよ」

必ず食事を摂らせるセヴンに苦笑しつつも、読みかけの本が気になるので、読み終わってから三日くらい眠ろうと決め、ノルジスはお茶を呑み終えると食堂を出た。

「眠るなら寝台にしてよー？」
「わかってるよ」
「椅子は寝台じゃないんだからねー？」
「それもわかってる」

転寝はしても熟睡はしない、と宣言して、読みかけの本を置いている自室へと戻る。
その途中の廊下で、開けられた窓から入り込んできた風に足を止めた。

「……セヴーン」
「なぁーにぃー？」

狭い家だから、少し声を大きくすれば台所にいるセヴンに声が届く。セヴンの声も、廊下にいるノルジスに届く。

「きみ、今日は学校に行ってないんだよねえ？」
「行ってないよー。だって休みだもーん」

セヴンはまだ学生だから、昼間は学校に通っている。だが試験休みに入っているので、今日は学校に行っていない。学校に行ってい

ないということは、街にも出ていないということだ。
おかしいなぁと、ノルジスは風が入り込んできた窓から外を見やる。

「なに、どうかした？」

セヴンが片づけの手を休めて、廊下に出てきた。

「街に出かけた？」
「出かけてないよ。お米の収穫してたもん」
「なら、レヴンに逢いに行ったりした？」
「行ってないよ。今日はレヴン、急ぎの用事があるって言ってたから。なに？」

おかしいなぁと、ノルジスは首を傾げ、セヴンに窓の外を見るよう促す。

「あれ、なにかな」
「ん？　……、うわあっ！」

窓の外を見やったセヴンは、驚きに目を見開いて声を上げた。

「なんで竜騎士がいるのっ？」

それはこちらの台詞だ、とノルジスはセヴンを見やる。

「きみが連れてきたんじゃないの？」
「なんでおれが！」

違うよ、と否定するセヴンに、ノルジスは唇を歪める。

「尾行されたりしなかった？」
「されたらわかるよ！　だっておれ、ノルジスのところにいるんだよ？」

尾行がわからないわけがない、と自信たっぷりにセヴンは言う。しかし、セヴンには少し抜けたところがある。その性格を知っているノルジスとしては、おそらくこの事態はセヴンの気の緩みが原因だろうなと思った。

「竜騎士かぁ」

窓の向こうに見えるのは、今まさに竜の背から降りた騎士がいて、ノルジスを視界に捉えている。目を逸らそうとしない竜騎士に、目的は僕かな、とノルジスはため息をついた。

「なんで今さら来るかなぁ……」
「え、知り合い？」
「違うよ」
「なら、どういう意味？」
「僕がここに不可侵の結界を張っている理由」

竜騎士を招かないようにするためのもの、つまりはどこかの国からの使者が来られないようにするための目暗ましの結界が、ノルジスの家を囲んでいる。簡単な結界なので、この家から学校に通うセヴンを尾行すれば、呆気なく破れてしまうものだ。

「おれのせい？　でもおれ、尾行なんてされてないよ？」
「されたと思うよ。僕は家から出ないからね」
「……、ごめんなさい？」

「そうだね」

素直に失態を謝るセヴンの頭を撫でたとき、こちらから視線を外さなかった竜騎士が歩を進めた。

「トーエイの森に住まう魔術師どの、だろうか」

凛とした声に、やっぱり目的は僕か、とノルジスは肩を落とす。

「僕はべつに、森に住んでいるわけではないんだけどね」

「だよね。ノルジスは閉じ込められてる」

「それ、なんて言うか知ってるかい、セヴン？」

「封印でしょ？　あっさり破ってるけど」

くす、と笑ったセヴンが、ノルジスの肩に並んで立ち、ノルジスのほうに声をかけた竜騎士に笑いかける。

「ノルジスになにか用？」

セヴンに問われた竜騎士は、立ち止まることなく窓の近くまで来る。くすんだ赤い髪と、澄んだ紅い瞳に、ノルジスは懐かしさを感じた。

「話を、聞いてもらいたい」

そう答えた竜騎士に、セヴンが一笑する。ノルジスは、呆れた空笑いしか出なかった。

「ノルジスに話って、なにそれ」

嘲笑うように、セブンが言った。

「勝手なのは承知だ」

「じゃあ断られても仕方ないよね。帰ってよ。そして二度と来るな。ノルジスはあんたらの話なんか聞かない」

「悪い話ではない。聞くだけでも……」

「いいから、帰りなよ」

問答無用なセヴンに、竜騎士は少したじろいだが、諦めることはなかった。

「頼む。わたしの話を聞いて欲しい」

「だから聞かないって。帰って、竜騎士のお姉さん」

セヴンは抜けたところもあるが、けっこう容赦ない性格をしている。諦めればいいのに、と他人ごとのように見ていたノルジスは、しかしふと、首を傾げる。

「おねえさん？」

どこにそんな人がいただろう。

「え、ノルジス？」

「セヴン、おねえさんって？　どこにいるの？」

「……僕、竜騎士のお姉さんって、言ったよね」

「竜騎士の……えっ？　そっち？」

凛々しい姿にうっかり男だと思っていた竜騎士は、どうやら女性のようだった。

「ツヴァイ・ファインと言います、魔術師どの」
「あ、ちょっと、なに自己紹介してんの、竜騎士のお姉さん」
「魔術師どの、どうかわたしの話を聞いて欲しい。悪い話ではないのだ」
「無視しないでよー」

矛先をセヴンからノルジスに向けた竜騎士、ツヴァイ・ファインと名乗った彼女は、真っ直ぐな紅い双眸でノルジスを見つめてくる。よくよく観察すると、確かにツヴァイは男ではなく、女性だ。全体的に丸みがあって柔らかそうで、しかし竜騎士なだけあってしなやかな体つきをしている。

「うん、好み」
「はっ？　ちょっとノルジス！」
「ん？」
「女好きも大概にしてよね！」
「失礼な。おれは人間が大嫌いだよ」
「女は大好きでしょ」
「女が嫌いな男はいないなぁ」
「たらし！」

やめてよね、と文句を言うセヴンに笑って、ノルジスはきょとんとしたツヴァイに視線を向ける。
ああ、やっぱり紅い瞳は懐かしい。

「僕はノルジス。トーエイの森に住み着いているわけではないから、ただのノルジスと呼んでくれていい」
「ちょ、ノルジス！」
「で、この子はセヴン。おれの……まあ息子かな」
「養育する義務がある息子だよ！　なにその過去の過ちを認めたく

ないっていう雰囲気！　って、そうじゃなくてねえ、なに自己紹介してんの、ノルジスってば」

ぎゃいぎゃい言うセヴンの頭を撫でて落ち着かせると、ノルジスはツヴァイにっこり微笑みかける。

「わざわざ来てもらって悪いんだけど、僕、話を聞く気はないから。悪い話じゃなくても、いい話でも、どちらでもね」

「あなたが魔王だというのは本当か」

「ぅおっと……」

話を聞く気はないと言ったばかりなのに、無理やりにでも聞かせる気だ。しかもその話題だ。なかなか強気に出てきてくれた竜騎士に、少しだけわくわくしてしまうのは許して欲しい。

「もしそうならば……頼む、今すぐここから逃げてくれ」

「……、はい？」

「あなたの命が危ない」

「僕の命？」

悪い話ではないと言ったくせに、まるっきり悪い話ではないか。これはちょっと、きちんと竜騎士の話を聞いておくべきではなかろうか。そう考えていると、セヴンが目で訴えてきた。

「ああはい、話を聞いておこうか？」

「違う！　厄介ごとから逃げろって訴えたの！」

どうも息子との触れ合いはいまいち上手くいかない。そう思っているのは、ノルジスだけかもしれないが。

「まあ聞くだけ聞いてもいいかな」
「ノルジスのあほ！」
セヴンがなにか言っているけれども、軽く無視して、とりあえずお茶をお願いした。

０１　：　トーエイの森の魔術師。（後書き）

誤字脱字、そのほか怪文書がありましたら、ひっそりこっそり教えてください。

読んでくださりありがとうございます。
とりあえず勢いだけで書いたのですが、楽しんでいただければ幸いです。

津森太壱。

02 ： トーエイの森の魔王。

「つまり……勇者が、召喚されたと？」
「はい、そうです」

ツヴァイの話は簡単だった。
トーエイの森に封印されているはずの魔王が、最近になって封印を破り表に出てきた。魔王についていた者たちは、これ幸いと再び悪行を重ね、世界は魔に溢れようとしている。魔王はそれを高らかに笑いながら眺め、かつて自分を封じた者を殺してやろうと今捜しているらしい。だから世界を代表した神殿が、勇者を召喚したとのことだ。
なんて安易な話だろう。

「この森に魔王っていたの？」

セヴンが、本気で「そんなのいた？」的な顔をしてノルジスに訊いてくる。
訊くなよ、と言いたい。

「この森にいるのは、昔も今も、僕だけだよ」
「だよね？　ノルジスしかいないよね？」

どこに、魔王、とかいう人物がいるのか。セヴンは、わざとではないだろうが、きょろきょろと大袈裟に周りを見渡す。

「魔王って……随分と昔の言葉だと思ったけどなぁ」
「年寄りみたいな言い方するね、セヴン」
「明らかにノルジスの息子だから安心して」
「え、なにを安心すればいいの」
「おれはノルジスの息子だから」

ちょっと前に、「まあ……息子みたいなもの」と言ったのを、かなり根に持たれてしまったようだ。冗談だったのに、こんなときに限って本気に捉えるから、この息子はちょっと可愛い。

「だったら、パパって、可愛く呼んでくれてもいいのになぁ」

ついでに眠りから起こすときも、可愛らしい微笑みで優しく起こして欲しいものだ。寝台から叩き落とす、全裸にさせて放置する、いきなり風呂に突っ込む、とか、可愛くないったらない。

「呼ばれたくないってノルジスが言ったんでしょ」
「あれ、そうだった？」

セヴンとはずっと一緒にいるせいか、いちいち日常の言葉を記憶しておく必要がない。だから、随分と前に言ったことなどすぐに忘れてしまう。

「おっと……話が反れた。魔王と勇者だったね、今は」

脱線してしまったのを軌道修正すると、さすがに親子の会話には目が点になったツヴァイがいた。

「本当に親子……？」

うっかりとそう呟くくらいには、呆気に取られていたらしい。
「紛れもない親子だよ。レヴンもいるから、ノルジスってば実は二児の父親です」
「そ……そうですか」
「似てない？」
「ま、まあ……」
「それはよかった」
「え？」
「ノルジスみたいな女好きにはなりたくないからね！」
「は？」

それはちょっとひどいな、とノルジスは口を挟んでおく。

「僕は女性が好きなだけで、人間は嫌いだよ？」
「なんであれ女であれば態度変わるじゃないの」
「女性と子どもには優しく。そう教わったからね」
「このお姉さん、竜騎士だからね？　女というより騎士だからね？」
「最近の女性は逞しいねぇ」
「女騎士は昔から存在してたよっ」
「え、そうなの？」
「ノルジスってどこまで記憶力悪いのっ？」

頭はだいじょうぶかと、乱暴に揺すられて目が回った。
忘れられているようだが、ノルジスは一週間ほど眠っていない。
そろそろ眠気に負けそうなほど、体力がない。

「あ、ちょっと死んでいい？」
「ああごめん」

軽く謝られた。
「あの、話を……いいでしょうか」
「そうそう、脱線してしまったね。魔王と勇者の話をしなくては」
本題を大いに忘れかけていた。
「トーエイの森にいる魔王を倒すために、勇者が召喚されたのだったね」
「はい、そうです」
「この森に勇者が必要な存在はいないんだけどねえ？」
「そのように、見受けられます。ですが、わたしがこの森に入る際、確かに今までになく魔が多く見られました。わたしは竜騎士ですから、それほど困りませんでしたが」
「きみ、そういえばどうやって森に入ったの？　僕はこの森に不可侵の結界を張っていたのだけど」
「ふつうに入れましたが？」
「ここにもふつうに来れた、と？」
「はい」
ふむ、とノルジスは唸る。
どうやらツヴァイを招き入れたのはセヴンではないようなのだが、だからといってツヴァイが入って来られるような安易な結界でもない。いくら破るのが容易い結界でも、セヴンの姿を見ずして破ることは敵わないのだ。
とすると、犯人はセヴンではない。
「レヴンか」
「レヴンがなに？」

「僕の結界を壊していったようだね」
「ああ、確かにレヴンなら壊すかも。けっこう乱暴者だからね」
セヴンがちょっと抜けた性格なら、兄のレヴンはちょっと抜けた乱暴者だ。その怪力が尋常ではないと、いつになったら気づいてくれるだろう。

「もしかして、魔王の正体もレヴンだったりしない？」
「まあ可能性的には大いに。レヴンの印象なら、魔王に見間違えられてもまあおかしくないからね」
「あほ兄貴捕まえてこようか」
「そうだね。とりあえず捕まえておいで」
「はーい」

ちょっとそこまで行ってくるよ、という軽いノリで、セヴンは行ってしまう。もちろんそれくらいのノリで充分な成果を得られるから、問題はない。

「え、あの……ノルジスどの？」
「ノルジスでいいよ。とりあえず魔王もどきをセヴンが捕まえてくるから、話を進めておこうか」
「はあ……しかし、その、だいじょうぶですか？」
「なにが？」

どうも呆気に取られ易いツヴァイは、しかしノルジスとセヴンの軽さについていけないだけである。
ノルジスが首を傾げると、きりっと表情を改めた。
「先にも言いましたが、今この森は魔に溢れています。この家の周囲だけ不思議なことに安全なのですが、だからこそ、一歩でも外に

出たら危険です。セヴンどのをおひとりで行かせてしまうのは……」

ツヴァイは、自分の経験からセヴンが危ないと、心配してくれているらしい。

ノルジスはにこりと、微笑んだ。

「セヴンを心配してくれてありがとうね」

「え……は、いえ、わたしは竜騎士として見過ごせなかっただけで」

ノルジスの笑みに少し頬を赤らめたツヴァイは、それでもちらりちらりと背後を見やり、セヴンを心配してくれる。

けれども、とノルジスは暢気に、セヴンが淹れていってくれたお茶を啜る。

「あの子はこの森から、麓の都市にある学校に通っている。歩き慣れた森だから、だいじょうぶだよ。それに……可哀想なことになるのは、魔のほうだからね」

「は……い？」

「僕のセヴンに手を出す魔なんて消滅すると思うよ？」

「しょ……消滅」

にこり、と笑みを深めたら、なぜだろう、ツヴァイが顔を引き攣らせた。

「あれ？　僕、なにか変なこと言ったかい？」

「い、いえ！」

「ああごめんね？　ここ数年、十数年かな、話し相手がセヴンとレヴンだけだから、ちょっと言葉がおかしいかもしれない。記憶も曖昧だからね」

「お気になさらず！」

「そうかい？」
「はい！　それより、魔王に御心当たりがあるようですが！」
急に硬くなったツヴァイに、さてどうしたのだろうと思いながら、なにもないそこを叩くように空を指差す。
「噂を、聞いたことがないかな」
「どのような噂でしょう」
「真っ黒な竜騎士が空を横切る噂」
「それは……」
思い当たる噂があるのだろう。ツヴァイは少し思案して、彼女の国で聞く噂を話してくれた。
「悪くもなければ、好いわけでもないのですが……親が子に聞かせるものとして、黒い竜騎士の話があります。悪さをすると黒い竜騎士が地獄へと連れて行くぞ、と」
「ふぅん？」
「随分と昔から存在する子どもへの戒めですが、それがここ数年、本当に黒い竜騎士が空を飛ぶようになって……滅多に見かけませんが、だからこそ、悪いことが起きそうだと、人々は恐れています。そういう噂でしたら、耳にしたことはありますが？」
うん、とノルジスは頷く。まさに、それだ。
「それ、僕のもうひとりの息子ね。よろしく」
「そうでし……、はっ？」
面白いくらい驚いてくれて、こちらとしても満足だ。ころころと表情が変わる竜騎士でよかったと、つくづく思う。

「それがレヴン、セヴンのお兄さんだよ。レヴンの竜は黒竜だから、ついでのように自分まで黒づくめになっちゃうような、ちょっと残念な子でね。せっかくきらきらした容姿に作ってあげたのに、なんで台無しにしちゃうかな？　黒竜をあげたのがいけなかった？　銀竜をあげたらきらきらしてくれたのかな？　まあとにかく、残念な子なんだよ」
「は……はあ」
「セヴンはその点、ちゃんときらきらしてくれているからいいけど。ほら、僕って髪も目も真っ黒でしょ？　きらきらすることって、たまに瞳が銀色になるくらいで、ふだんは一つもきらきらしないわけ。だから子どもたちにはきらきらした要素をあげたんだけど……レヴンはどこで失敗したのかな」
「……わ、わたしが言うのも、おかしいかもしれませんが」
「うん？」
「その……育て方を間違えられたのでは？」

ハッとした。

「僕が悪いのかっ！」
「いえそういうわけではありませんが！」

そうか、とノルジスは項垂れる。
ツヴァイに指摘されるまで気づかなかった。どうやら長男の育て方を、間違えてしまったらしい。いや、だからこそ次男のほうにはきちんと、レヴンのようにはならないようにと気をつけることができた。おかげでノルジスの望みどおり、セヴンはきらきらとした淡い金髪を、さらさらと太陽にかざしてくれる。いつだってそれは目に優しい。瞳も、琥珀色の双眸は太陽の光りで優しく輝く。

「セヴンはきちんと育てられた気がする、うん」

あまりのきらきらに恨めしくなるときもあるが、まあそれは置いておく。自分が真っ黒だという残念さに拍車がかかるだけだ。

「……ノルジスどのの、それは、本物ですか？」

「ノルジスでいいってば。それって？」

「では、ノルジス。その、髪や瞳の色、です。真に、漆黒なのですか？」

紅の色を持つツヴァイには、ノルジスのこの色は珍しいかもしれない。いや、この世界的にも珍しいだろう。

「忌み子」

「はい？」

「僕が、忌み子であるか、そう訊きたいんだろう？」

ふう、とノルジスはため息をつき、しかし口許には笑みを浮かべたまま、腰かけていた椅子に深く座り直した。ツヴァイは、口を噤んだようだ。

「そうだよ、僕は忌み子だ。誰からも嫌われる。人間に好かれたことなんて一度も……ああいや、一度だけあったかな。魔術師として、僕は都市に呼ばれた。あの頃は若かったからね……乞われたらなんでもしたよ。喜ばれることが純粋に嬉しかったからね。けれど……長くは続かなかったなぁ」

もう忘れたと、思っていたけれど。

思い出してみれば、意外にも記憶は蘇ってくるもので。

楽しかった気持ちも、嬉しかった気持ちも、そして悲しかったり

虚しかったり、憎く思ったりしたことも、すべて思い出すことができる。

「……あなたは、本当に、トーエイの森の魔術師でしたか」
「住み着いているわけではないけど、そこは否定しなかったでしょ」
「では、あなたは……」

顔色を白くしたツヴァイに、やっぱりそういう顔をするのかと、少し残念に思いながら、しかし嘘をつけるほど優しい性格ではないノルジスは、はっきりと告げる。

「魔王と、呼ばれたこともあるよ」

かちりと、ツヴァイの腰にある剣が、小さな音を出す。

「セヴンやレヴンには、内緒。父親が魔王なんて……あの子たちが笑って喜ぶだけだからね」
「……、は？　あの、そこは悲しむのでは？」
「突っ込めるようになったね、竜騎士さん」

いい成長ぶりだ、と笑うと、ツヴァイがまた顔を引き攣らせた。

「話がまた反れてしまったね。とにかく、僕に心当たりがある魔王は、僕の息子だから。しばらくおとなしくさせるから、それでいいでしょ？」
「今あなたが自ら魔王だと名乗りましたが」
「いやだなぁ、それは場の雰囲気だよ。それにほら、魔王のイメージって黒なんでしょ？　僕って忌み子だから、それに該当するんだよね」

きらりと、ツヴァイの目が光った。
「今、わたしの耳に理解できない言葉がありました」
「……わぉ」
しまった、と思ったが遅い。誤魔化そうと思ったのに、よくもまあ短時間でここまで成長してくれたものだと、ノルジスのほうが今度は顔を引き攣らせた。
「いめーじ、とは、どの国の言葉でしょう」
ここで笑って誤魔化せるだろうか。できなかったら、自分は彼女に、斬られることになるのだろうか。いやしかし、ツヴァイは「逃げろ」と言っていた。「命が危ない」とも、言っていたではないか。
ツヴァイにその気はない。理由は知らないが、トーエイの森にいる魔王を殺すつもりは、彼女にはない。
目的はなんだろう。
今さらだが、ノルジスは首を傾げた。
「あなたが、魔王なのですね」
「……セヴンとレヴンには黙っていてくれる？　いやあのね、あの子たち、本気で喜ぶから」
「あなたが忌み子として嫌われ続けたのなら、あなたの御子である彼らは、確かにあなたが魔王であることに喜ぶでしょう」
「竜騎士さん、実はものすごく頭の回転が速いね？」
「あなた方の軽さに気を取られたのは事実です。まさか、こんなに軽いお方が魔王だとは、思いもしませんでしたので」
なにが悪かったのだろう、と考えてみる。
一つ言えるのは、起きた時期が悪かっただけ、だろう。そして、

起きてすぐ一週間も起き続けたのもいけなかった。本になど夢中にならないで、さっさと眠ってしまえばよかったのだ。そうして、またいつか起きる。その生活を、セヴンとレヴンに護られながら、永遠に続けていればよかったのだ。

「休眠があるって、便利なようで不便だね」

はあ、と諦めにも似た肯定をツヴァイに見せると、ちょうどよく空に、黒い影が降りてきた。

「父になにしてるか、竜騎士！」

「……ちょっと片言に聞こえるのはなぜかな、レヴン」

「父から離れろ、ちゅうきち！　あ、噛んだ」

「噛み過ぎだよ」

いったいどれだけ人と触れ合わない生活を送ったのか危ぶまれるレヴンの声に、ノルジスは笑った。

０３　：　トーエイの森の魔王もどき。

レヴンの黒竜は身体の大きさを自由自在に変化させられる。レヴンとセヴン、ノルジスの親子全員が騎乗してもまだ余裕があるほど巨大になったり、ノルジスと背を同じくしてみたり、肩に乗れるくらい小さくなってみたり、とにかく身体の大きさを自由に操ることができる竜だ。

今日はツヴァイが連れてきた竜、恐らくは一般的におとなしいとされる緑竜がいるので、ノルジスと背を並べることにしたらしい。レヴンを放り投げて巨体を縮めた黒竜は、ノルジスと同じくらいの大きさになって、のしのしと駆け寄ってきた。

「ベジ、きみ、そのまま僕に突っ込んできたら、今度こそ解剖してあげるよ？」

笑顔で黒竜に話しかけると、黒竜の足が一度ぴたりと止まる。ノルジスの言葉を理解したからだ。

竜という生きものは気難しく賢い。波長が合えばたまに会話ができるが、会話を許してくれるのは緑竜だけで、竜騎士と呼ばれる彼らの竜がそうだ。

レヴンの竜である黒竜は、今のところノルジスが確認しているこの目の前の一匹だけなので、生態はよくわからない。とりあえずノルジスは会話ができる。レヴンもセヴンも、なんとなく黒竜の言葉はわかるらしい。

ゆえに、生態のわからない黒竜は、ノルジスに解剖などされたく

ないために、走っていた足を停めたのである。

「ああ残念、せっかく黒竜の生態を暴けたのに……」

至極残念に思って肩を竦めると、黒竜はびくりと大きく身体を震わせ、ぽん、と可愛らしい音を立ててとても小さな竜へと変化した。パタパタと羽を懸命に動かし、ふよふよとノルジスのそばまで飛んでくると、ゆっくりとその肩に足を落ち着かせる。巨大化したときの黒竜の鱗はとても硬く、それだけで武器にもなるが、肩乗りできる大きさになると鱗は少し軟らかくなり、黒竜の低い体温がよくわかった。

ちなみにこの黒竜は雌、だからノルジスはその肩に乗ることを許していた。

「おかえり、ベジ。あとレヴンも、おかえり」

まずは黒竜を出迎えてから、ノルジスは息子と挨拶する。相変わらず残念な感じがするのは、せっかくのきらきらした姿を、黒ずくめにしているからだ。

「ただいま、ノルジス。あと久しぶり」
「うん、久しぶり。久しぶり？」
「ずっと眠ってただろ」
「この一週間ずっと起きてるよ」
「え、そうなの？　なんだ、もっと早くに帰ってくればよかったな……また寝ちゃうじゃないか」
「その予定だったんだけど……ねえ」

そばに来た息子の頭に乗っている外套の頭巾を取っ払ってから、きらきらした銀色の髪を見て頷き、ぽんぽんと撫でる。あとからセ

ヴンも追いついてきて、同じようにしろ、と目が訴えてきたので、セヴンの金色の頭もぽんぽんと撫でた。

「違う！」

「え、また違うの？」

「レヴン捕まえたご褒美が頭撫でるだけなんて……」

「ああ、そういうことか」

レヴンと同じ扱いは、セヴンには不服らしい。両腕に抱きしめて背中をぽんぽんしてあげると、にっこりと笑顔になったセヴンに喜ばれた。

「ところでノルジス？　あの緑竜はアルファンデスの竜騎士のもののようだけど」

セヴンばかりずるい、と言わんばかりのレヴンに背後から抱きつかれながら、レヴンがツヴァイの緑竜を見やって首を傾げる。そういえばツヴァイがいたなと、ノルジスは息子ふたりの過剰な愛情に苦笑しつつ視線を動かした。

「竜騎士のお姉さんが、魔王のことについて訪ねてきてるんだよ」

「魔王？　そんなもの、どこにいるんだ？」

「きみだよ、きみ」

「は？　おれ？」

なんで、と目を丸くしたレヴンが、ノルジスから離れてツヴァイの姿を確認する。ツヴァイは、やはり親子の戯れと、噂の黒い竜騎士の存在に、呆気に取られていた。

「黒い、竜騎士……本当にいた」

「竜騎士？　おれは違うぞ」
「では魔王か」
「誰だよ、それ」
「え……いや、だが」
「ノルジス、あの竜騎士はなんだ？　なんでノルジスのところに？」

ツヴァイがなぜここにいるのかさっぱり理由が思い当たらない、とレヴンは怪訝そうだ。もちろん、自分が黒い竜騎士だの魔王だのと呼ばれているかもしれないことを知らない息子は、当然のことながらわけがわからないだろう。
ノルジスはツヴァイが訪ねてきた理由を掻い摘んで説明し、ついでにその恰好が黒い竜騎士だの魔王だのと関連づけられるのだと、説教した。

「なんでふつうの恰好しないの？　せっかくきらきらした姿に作ってあげたのに、それって僕に対する嫌味だよね？」
「違う！　おれはノルジスの色が好きだから……黒って、カッコいいじゃないか」
「カッコいいって、きみね……黒は忌み子の象徴だよ」
「ノルジスは忌み子じゃない！」
「いやそうだけど、似たようなものだからね？」

髪も瞳も黒いのだから、この世界で忌み子でなくてなんだというのだ。
と、まあいくら言ったところで、レヴンは聞かない。もちろんセヴンもそのことに関しては聞く耳を持っていないので、優しい息子たちにノルジスの目じりは下がる。

「忌み子でない？　それは本当ですか、ノルジス」
「ちょ、竜騎士！　なにノルジスのこと呼び捨てにしてんのっ？

ノルジスさまって呼べよ！」
「う……す、すまない、セヴンどの」
「ノルジスが忌み子じゃないって、見ればわかるだろ。髪と瞳が黒いってだけで決めつけないでよね。だいたい、魔術師なら暗色を好んで身にまとうものだよ」

ノルジスに抱きついたままだったセヴンは、ツヴァイの反応にいたく腹を立てていた。ノルジスとしては、まあどうでもいいことなんだけど、と世界の自分に対する評価に投げやりで、むしろ息子たちが気にしてくれることのほうが心配である。ノルジスは、息子たちが思うほど「忌み子」という言葉に傷ついてはいないのだ。

「だって初めから黒いものだしね？」

きらきらしてみたかったなぁ、と思うから息子たちは銀と金に輝いているわけで、ノルジスとしてはそれで満足である。

「さ、これ以上は僕の話をしても意味ないから、本題に戻ろうか。そもそも、僕は眠いんだよ。このあと三日くらい眠り続けたいくらいには、すごい眠いんだよ。さっさと安眠を得たいから、話を終わらせよう」

話を魔王と勇者の召喚について戻そう、と提案し、魔王もどきの息子レヴンを、改めてツヴァイに紹介する。
このトーエイの森に魔王などいない、いるのは黒竜を移動手段にするレヴンという、学校の先生だ。そしてノルジス、セヴンという、レヴンの家族である。
ついでにノルジスは、その正体は過去に魔王と呼ばれた存在ではあるが、勇者が召喚されるほどの悪事は働いていないし、また働く気もない。そんな気力は、生まれたときに遡っても、起きたことの

ない気力である。

「魔王もどきのレヴンだけどね、ふだんこんな恰好だけど、このとおり髪は銀、瞳は琥珀だから、忌み子でもなければ魔王でもない、麓にある学校の先生だ。セヴンはその学校の生徒。僕はこのふたりの親だ」

「……話は、わかりました」

「そう、それはよかった」

「ですがノルジスさま」

「ノルジスでいいって、言ったのにねぇ……なにかな、竜騎士さん」

ツヴァイは、ノルジスが自分で明かしてしまったから、魔王の正体をわかっている。息子たちには黙っていてくれ、というのは、そのつもりで話す気はないようだが、説明を終えてもその目は諦めた様子が見られない。

いや、諦めるとはそもそもおかしい。

なにか変だな、とノルジスが首を傾げたとき、ツヴァイはとんでもないことを言った。

「わがあるじのところへ来ていただきたい」

「……。はい？」

なぜに、とノルジスが目を丸くすると、レヴンとセヴンが「勝手なこと言うなよ」と怒りだす。それを静かにさせて、どういうことだとノルジスはツヴァイに話を続けさせた。

「ノルジスさまは、魔術師であられる」

「うん、まあ、否定はしなかったからね」

「セヴンどのが、そうだとおっしゃられた」

「ああ余計なことを……」

「今このアルファンデスの国に、いったいどれだけの魔術師がおられるかご存知だろうか」
「うわぁ……言うと思ったよ、それ」

勇者召喚だの、魔王だのと、命に関わるようなことを言われたからツヴァイの訪問を許したノルジスだったが、やはりその話も隠し持っていたかと、今さらながらに後悔を感じる。

「わがあるじは、トーエイの森に住まう魔術師に逢いたいとおおせなのです。ノルジスさま、わたしと一緒に城まで来てもらえないだろうか」
「うーん……それ断ったら、もしかして明日にでも勇者がここに来るのかな？」
「あなた方が魔王であると、わたしはわがあるじにお伝えせねばなりません」

レヴンとセヴンまで巻き込むことになってしまった。これなら最初から、セヴンがそうしたように、ツヴァイを追い返しておくのだった、と思う。だがたとえツヴァイを追い返したところで、自分たちは魔王の扱いをされ、トーエイの森を追われるというより世界から追われる未来を迎えていたことだろう。
せっかく目くらましの結界を張っていたのに、とノルジスは残念な魔王もどきの息子を見やった。

「きみのせいだよ」
「そうだ、レヴンのせいだ」

父と弟に責められた魔王もどきの息子は、やはり「さっぱり意味が……」と、どんなに言ってやっても残念な見てくれを反省もせず、首を傾げた。

「こうなったらレヴンに着たらどんな色の服でも白くなる魔術を施しておくしかないかな」
「え、ちょ、ノルジスっ？」
「せっかく学校の先生になれたのに……この十数年、僕がどれだけ心穏やかに眠っていられたことか。レヴンが学校の先生に、セヴンが学校に通ってくれていたからだよ。まったく……」
「おれはもともと学校の先生になどなりたくなかったのだけど」
「一番収入が安定してるのは学校の先生なんだよ」
「人間の子どもなんて面白味ないぞ」
「だとしても、収入の問題だ！　僕がこの見てくれだから働けないの、よくわかってるのはきみたちだろ」
「ノルジスは働かなくていいよ。おれたちがいるんだから」
「だから！　だからきみを学校の先生にしたんじゃないかっ」
「学校は面白くない」

反抗的な魔王もどきの息子に、しかし天使っぽいもうひとりの息子は「それ賛成」などと言ってくれる。

「ノルジスが行っておけって煩いから通ってみたけど、面白くないんだよね、学校。ノルジス、学校のどこがいいの？」
「き、み、た、ち、は！　僕は収入の話をしてるんだよ！　お金なくして世の中生きていけないんだからねっ？　学歴は大切なんだからねっ？」

ちょっと説教っぽく叱ってみたのだが、こんなときばかり仲良くなる息子たちは揃って顔を見合わせたあと、ノルジスに首を傾げた。

「それでもノルジスを養えるよ」
「それでもノルジスと生きてきたよ」

大きく成長してくれた息子たちに涙が出た。

「おれはノルジスが笑っていられるなら、それでいいもん」

「おれも。ノルジスが笑うから、まあこの世界でもいいかなって」

まるでノルジスを神かなにかのように、いや、ノルジスをただひとりとして扱うことに、なんというかやはり育て方を間違えたのかもしれないと、つくづく思った。

「僕はきみたちのお父さんなんだけど」

「仕方ないよ。ノルジスが、おれたちをそう作ったんだから」

「う……」

「おれたちはノルジスの家族だからね」

にこ、と眩しい息子たちの笑顔に、なんだろう、本当に泣きたくなってきた。

「ノルジスさま、いいだろうか」

「……竜騎士さん、どう思う？」

「はい？」

「この残念な息子たち」

「……とても立派な、親想いの御子であられると思いますが？」

「立派すぎて涙出ちゃうよ、もう！」

親から自立しない、のではなく、親を自立させない息子たちだ。

「娘が欲しかったかも……」

「それはそれで、嫁に出すときに思いっきり泣くんじゃないの、ノルジス」

「それでも癒しにはなるよ、可愛いもん」
「おれたちだって充分、可愛いだろ？」
「可愛いけど！　けど……けど」
「けど？」
「……あんまり僕を甘やかさないでよ」

本当に、自立できなくなる。それは少し、いやかなり、情けない。

「親って、それでいいんじゃないの」
「なにが」
「子どもがさ、そばからいなくなるの、すごく寂しいんじゃない？　だからずっとそばにいてって、それってもう性だと思うよ？」

ねえ、とセヴンはレヴンを頷き合い、微笑む。

「……、ああもう！　なんていい息子たちなの」

ぐす、と半ば涙目で、ノルジスはやっぱり育て方を間違えたんだと、思った。育て方を間違えても、そばにいてくれる家族が、とても嬉しかった。

「よし！　じゃあ行こうか、アルファンデスのお城！」
「へ？」
「国仕えの魔術師って、給料いくらかな？　おれ、もう学校に通わなくていいよね？　レヴンも先生って立場から解放されるよね？」
「……セヴン？」
「そういえば、召喚された勇者ってどんな感じ？　やっぱりあれかな、最強の剣士とか謳われて、魔王倒すために仲間募って修行とかしてる？　お城に行けば逢えるのかな」

忘れかけられるが、そういえば本題は、勇者召喚と魔王の話である。ツヴァイに城に来てくれと言われたのは、その延長線上のことだ。

「セヴン、行く気？　レヴンも」
「だってレヴンのあほが結界壊したから、竜騎士のお姉さんがここまで来ちゃったわけでしょ？」
「まあね」
「おれがそうだと言わなくても、この森にいる魔術師はノルジスだし、おれもそうだし、レヴンだって本当は魔術師だからね。ノルジスがいやがったから国仕えなんてまっぴらだと思ってたけど、考えてみたらノルジスを養うのに国仕えって最高じゃない？」

収入の話をしたのが悪かったのだろうか。

「ノルジスは眠っててていいよ。おれとレヴンで稼いでくるから」
「あのね……だから、僕はきみたちのお父さんだよ？」
「忌み子だとか、魔王だとか呼ばれちゃう容姿してんだから、影でこっそりしててていいよ」
「え、なんで僕が魔王って」

知らないはずなのに、と本気で驚いたら、レヴンと視線を交わしたセヴンはにんまりと笑った。

「レヴンより魔王っぽいじゃないの、ノルジス」
「昔、そう呼ばれたことがあるっていうのは、知ってるよ」

レヴンも、今さらそんなこと知ってるよ、とばかりに笑う。

「だから国仕えがいやで、こうして隠れるみたいに生活してるんだ

よね？」

隠れ住むような生活の意図に、気づかないわけがない。

「ノルジスが魔王って、この世界も終わりだなぁと思うけど」

「驚きはしないけど。ノルジス強いし」

「でもノルジスだよ？　とにかく安眠が得られればそれでいいんだよ？」

「ノルジスは平和主義だもんね」

息子たちは、ノルジスが思っていた以上に、立派な成長を遂げている。

「だいたいおれたち、歳取らないじゃない？　おかしいと思ったんだよね」

「ノルジスなんて、おれたちが小さい頃から変わらないし」

「その時点で、ああなんか違うなぁと思ったよね」

「人間というより魔に近いとは思ったかな」

「父親が魔王なら、頷ける」

「ああ」

納得している息子たちに、気づいていたなら話せよ、と思ったが、ノルジスが言いださないことをこの立派な息子たちが口にするわけもない。

やっぱり自立は難しいなぁと、ノルジスは小さく息をついた。

「……来ていただけると、思ってよいでしょうか？」

「そうだね、竜騎士さん、僕はその気なかったんだけど」

「御子たちが、その気ですが」

「言いだしたら聞かないのは、僕のほうだと思ったんだけどなぁ」

充分にノルジスの血を受け継いだ息子たちは、もはや行く気満々である。これでノルジスが行かないと言い張ったところで、聞いてもらえるはずもない。

「竜騎士のお姉さん、今日これからもう行く？」

「できればこの家と森との接続を切り離してから行きたいと思うのだけど」

ノルジスの気力を無視して、セヴンもレヴンも出かける準備を始めていた。

０４　：　この世界の魔王。

ツヴァイは自分の緑竜に、ノルジスはセヴンと一緒にレヴンの黒竜に騎乗し、一向はアルファンデス国の城へ向かう。

トーエイの森から南に約一月の距離に、アルファンデスの首都リデルはある。竜の体調次第では半月の距離を、さっさと安眠を得たいノルジスは、魔術で約一週間の距離に縮めることにした。

「無茶です」

と、もちろんツヴァイは言った。竜の体調次第で半月の距離を、もっと時間をかけて進むつもりでいたらしいので当然だ。だいたいにして、竜の機嫌が悪くなれば半月の距離も一月に伸びる可能性がある。そんなに時間をかけていられないノルジスは、無茶を承知で一週間に縮めるのだ。

「僕に不可能はない」

「さすが魔王だね、ノルジス！」

セヴンが気分を乗せてくれるので、もっと気分を向上させるために、ツヴァイが騎乗している緑竜の周りに陣を描いた。ちょっと魔術師っぽいことをしている自分に満足して、短い詠唱をさらに追加する。同じようなことをレヴンの黒竜にも施して、準備は万端となった。

「え、それだけですか？」
なにをしたのだ、というツヴァイに、簡潔な説明をする。
「つまり、速度の調節をしたのです」
「え、いえ、なにもわたしの口調を真似ずとも……その前に、簡潔過ぎて意味が」
「竜騎士に魔術を説明しても意味ないでしょ」
「は……ま、まあ、そうですが」
それでも説明が欲しい、というツヴァイに、それでも時間の無駄だとノルジスはそれ以上の説明をしなかった。
「さっさと行こうか。僕は眠いからね」
「移動中、休まれてもかまいませんが」
「それができれば苦労はないよ」
「は？」
「行くよ」
道案内しろ、とツヴァイを促し、ノルジスが巨大化した黒竜の背に騎乗すると、まもなく出発する。
「寒くないか、ノルジス」
「咽喉が渇いたりしたら言ってね。とりあえず、あるだけの食糧は持ってきたから」
「気分が悪くなっても言ってくれよ？　ベジは気をつけると言っているけど」
「ああもう、竜の上でも本読もうとしないでよ。風が強くて無理だよ、ノルジス」

息子たちの甲斐甲斐しい世話に、しかし不思議に思うことなく接していると、斜め前を進むツヴァイが半眼した顔をこちらに寄越した。

「過保護ですね」
「そうかな」
「ええ。残念どころか、とても立派過ぎて、少し心配になってきました」
「まあ僕もたまに心配になるけど。それより、竜騎士さんの緑竜の名前は？」
「あ、はい。紹介が遅れました、緑竜のララファです」
「ララファ。子守唄みたいな名前だね。女の子かな」
「はい、雌の緑竜です」

ちらりとノルジスに視線を寄こしたツヴァイの緑竜から、よろしくね魔王さま、という声が聞こえてくる。僕は魔王ではないよ、という苦笑と共に声を返すと、あらあなたは可愛らしい魔王さまだわ、と返された。だってわたしたちの声を聞くのだもの、と。

「意志疎通できるだけなんだけど」
「は、なにか？」
「いやいや。もうそろそろ気をつけてね」
「はい？」
「速度が上がるよ」
「速度……？」

注意を促したとたん、完全の風の軌道に乗った竜たちの速度が、目に見えて上がった。身に受ける風の抵抗を魔術で回避させているので問題はないが、下の景色は見ないほうがいい。まず目を回す。

「は、はや……っ」
「これぞ魔術」
「こ、これは、竜たちの体力を」
「だいじょうぶ、僕の魔術は完璧だから」

ノルジスが施した魔術は、竜の体力を奪うものではない。いくら速度が増しても、その疲れが竜を襲うわけではないのだ。

「うーわー、速い速い。これならすぐに首都に辿り着くね」
「セヴン、下を見たらいけないよ。レヴンも、酔うよ」
「だいじょぶだよ、おれは。レヴンだって、ベジに乗り慣れてるんだから」
「……だと、いいけどね」

数分すると、黒竜の手綱を握っていたレヴンがぱたりと転がってきた。

「よ、酔った……」
「なんて間抜けな子」

だから下を見るなと言ったのに、やっぱり残念な息子だ。
乗りもの酔いしたレヴンに代わってセヴンが手綱を握り、自分の前に具合が悪くなったレヴンをノルジスが介抱する。ノルジスのほうこそ眠気で倒れてしまいたいくらいなのだが、レヴンがこれではそうも言っていられない。

「う、気持ち悪……」
「ちょっと竜騎士さん、僕の話のどこを聞いていたのかな」
「すみませ……」

ツヴァイまで乗りもの酔いしてくれた。仕方ないので回復魔術を施してやろうと、先にツヴァイにその魔術を施したところで、さすがのノルジスにも体力の限界がきた。

「ん、レヴンはこのままでもいいか。セヴンがいるし」

ツヴァイのほうは騎乗しているのがツヴァイだけだから仕方ないとして、こちらにはセヴンがいてくれる。レヴンを放置していても問題はない。そのうち回復するだろう。

「ノルジス？　具合が悪くなった？」

「僕はいいから、きみは休みなさい。まったく、なんで僕の忠告を聞かないかな」

「……ごめんなさい」

「素直でよろしい。ほら、おとなしく横になってなさい」

膝にレヴンの頭を抱いて、ぽんぽんと撫でてやる。役得、とか思っているのか、ちょっと嬉しそうだ。セヴンが睨んでいる。

「おれもノルジスに膝枕してもらいたい」

「レヴンが回復したらね」

「いいの？」

「いい加減、僕も眠りたいからね」

「首都なんてあっというまだよ！」

任せとけ、とやる気を出したセヴンに笑っていると、ツヴァイに「申し訳ない」と謝られた。

「これに懲りたら、黙って前を見て進んでね」

「はい、ありがとうございます」

自身の竜で乗りもの酔いしたということがかなり悔しいのか、それからツヴァイは口を閉ざし、目的地の指示をしたあとは話しかけても返事くらいしかしなくなった。

「暇だな……」
「やっぱり本読む？」
「そうする。風の精霊さん、本読みたいから、できるだけここを避けて通ってね」

持っていた本に魔術を施すと、精霊の協力をもらい、レヴンの頭を膝に乗せたまま読書に入る。この一週間ずっと読んでいる本は、以前にも読んだものだ。とくに面白いわけではないが、先が気になる程度には読み易く、以前読んだ内容を咀嚼し直すことができる。

「ノルジス、一日めの移動が終わったよ。騎士の砦にお世話になるけど……って、駄目か。レヴン、ノルジスお願い。おれ、食事の用意するから」
「わかった。ああそうだ、風呂にも入れたほういいよね。もらえるのかな」
「どうだろ？　ねえ竜騎士のお姉さん、お風呂もらえる？　おれたち、二日に一回はお風呂に入りたい派、なんだよね」
「風呂はかまわないが……ノルジスさまはいったい」
「気にしないで。むしろ邪魔すると怒って手がつけられないから、こっちに意識が向くまで待つしかないの。じゃあお風呂の用意、お願いね。厨房ってどこかな」
「そうなのか……あ、厨房はこちらです。わたしたちのほうで用意するが」
「ノルジスはおれが作ったのじゃないと食べないから。ああでも、お姉さんは自分でどうにかしてね？」

「はあ……」

本はどんなものであれ、読み始めると止まらない。なにかきっかけをもらえればふと意識が外のほうに向かうのだが、それまでは本から意識を引き離せないから自分でも困る。

「ノォール！」
「ん……んん？」
「ご飯だよ」

はっと、本から顔を上げる。身体がほかほかしていた。

「……あれ？」
「お風呂もらったの。気持ちよかったね」
「気持ちよかった、ね？」
「さあ夕食。お昼は炊き込みご飯だったからね。今度は炒めたご飯だよ。お吸いものは南瓜を煮詰めて甘じょっぱくして、あとは野菜を生で彩りよく添えてみました。レヴン用に肉もちょっと炒めたけど、食べる？」
「肉はいいかな。野菜多めにちょうだい」
「はいはーい」

いつのまにか夕食の時間だ。親子で揃って食べるのは、どれくらいぶりだろう。

「竜騎士さんは？」
「砦に食堂があるからそっち」
「もう砦にいるのかい」
「思った以上に進めたね。あと三日もあれば首都に着くんじゃない？」

生野菜をたっぷりよそってもらった椀を受け取りながら、ふぅん、と適当な相槌を打ち、いただきます、と声を揃えて食事を始める。
食べながら周りを見渡すと、いかにも砦といった様相が目に入った。この部屋は客室だろうが、なんとなく豪華な感じがした。貴族階級の高官が泊まることも考えて作られたのかもしれない。

「そういえば……森を出たのは随分と久しぶりかなぁ」
「レヴンが学校の先生になってからは、初めてかな？」
「うん、そうだね。十数年ぶり……あんまり変わってないなぁ、外は」

窓から見えた夜景は、十数年前に眺めた景色とあまり変わらない。少し光りの数が増えたくらいだろうか。

「ねえノルジス、いっそこのまま森との接続、切っちゃったら？」
「なんでまた」
「しばらくおれとレヴンは国仕えの魔術師やるつもりだし、ノルジスだけ森に返すなんていやだし、それに森に居続ける理由もないでしょ」
「まあ……」
「ノルジスの正体がアルファンデスの偉い人に知られちゃったら、森に居続けることもできなくなるかもしれないよ」
「うーん……目くらましの結界があるから、それは問題ないけど」
「どうしても森にいたいの？」
「そういうわけでは……ただあそこは、僕が生じた場所だからねぇ。きみたちが生まれた場所でもあるし」

故郷、と言える場所があるとしたら、今はあの森だけだ。だから、護りたいかと訊かれたら、護りたいかな、と思うくらいの執着はあ

る。けっこう大切な場所だ。簡単に捨てることはできない。

「今すぐ、とは言わないし、強制もしないけど……まあいいか。ノルジスがいいなら、そのままでいいよ」

「ごめんね？」

「謝ることじゃないよ。ただし、おれたちを置いて帰ったりしないでね？」

一緒にいてよ、と言ってくるセヴンと、同じような顔をするレヴンに、いい息子たちに巡り合えたなぁと思いながら頷いた。もとより息子たちを置いていくつもりはない。自分の子どもだ。子どもから自立できない親だから仕方ない。

夕食後、ツヴァイが様子を見に少しだけ顔を出し、明日朝一番に砦の騎士団長が挨拶したいと言われたが、見てくれが忌み子だからと遠慮した。それでも、と砦の騎士団長は思ってくれたようだが、そもそもノルジスは挨拶される覚えがない。国仕えの魔術師になるつもりでいるのはセヴンとレヴンであるし、それならふたりの息子に挨拶してくれと言ったら、今度は息子たちが願い下げだと文句を言ってきた。

「まだ国仕えって確定したわけじゃないし」

「見せものになる気はないよ」

どうやら砦内では、きらきらした容姿の息子たちがかなり目立ったらしい。ちょっと注目の的になっているようなので、そんな好奇な視線をもらいたくないのだろう。

「将来的なことを考えるなら、団長と挨拶くらいは、いいんじゃないの？」

「団長だけならいいけど……どうする、レヴン？」

あまり乗り気ではない息子たちだったが、最終的に砦の騎士団長にだけは、声をかけることにしたらしい。

ほっと安心した様子のツヴァイが立ち去ると、ひとりで眠るには大きいが、だからといって親子で眠るには小さい寝台に、親子で潜り込んだ。というのも、ノルジスが寝台の中心を陣取って本を広げたら、右にレヴン、左にセヴンが潜り込んできて、ノルジスを挟んで勝手に「おやすみ」と宣言したからだ。

なんだこの愛情過多な子どもたちは、これはなんの我慢大会だ、と思いつつも追い出さないのがノルジスである。

「きみたちね……。おやすみ」

懐かれているのは、慕われているのは、素直に嬉しいノルジスである。ぽんぽん、と息子たちの肩を撫でて安眠を促すと、自分は少量の明かりで本を読み明かした。どんなときでも本を読もうと思う気持ちがあるから、たまに自分自身に対して便利だと思う。

「熊が鎧着て帯剣してたけど、あれって知力あるのかなっ？」

翌朝、朝食を終えてから砦の騎士団長に挨拶してきたセヴンとレヴンが、声を揃えて明らかに失礼な発言をしてくれたので、とりあえず一発ずつ頭を叩いておいた。

「この世界に獣人はいないよ」

「えっ、いたよっ？」

「団長は人間です」

「うそ、あれ熊だって！」

「もう一発叩かれておこうか、セヴン」

熊な騎士団長には逢っておくべきだったか、とちょっと惜しい気もしながら、その日も首都の城に赴くべく支度をすると、一時間後には竜の背に乗って空を飛んでいた。

「わがあるじのことを、お話しておきます」
「ああそうだ、そういえば竜騎士さんのあるじさんに、僕らは呼び出されたようなものだったね」

最初に訊くべきだったが、セヴンもレヴンも国仕えの魔術師になることばかり話していたから、うっかり訊きそびれた話題だ。

「わがあるじは、名をアルマ・フェリトワ・アルファンデス。アルファンデス王の第二子、継承権第三位のお方です」
「竜騎士だから王サマがあるじかと思ったんだけど、違うんだね」
「はい。わたしはフェリ殿下の部下です」

もちろん王に対しての忠心はあるが、それ以上に王の第二子への忠心が強いらしいツヴァイは、逢いたいと言っている王の第二子フェリトワのもとへノルジスたちを連れて行くようである。王には逢わなくてもいいと言われた。

「王サマに挨拶しなくていいの？」
「魔術師団を統括しておられるのはフェリ殿下です。王は魔術師にそれほど興味はありません」
「ふぅん……魔の増加を気にしているなら、魔術師は防衛の要だろうに」

息子たちやツヴァイには下の景色を見るなと言ったが、自分は見てもなんともないノルジスは視線を下に送り、魔が増加していると

いう様子を窺う。
確かにあちこちから、魔、と人々から称される存在の気配が確認できた。これくらいなら人間の手でも討伐くらいはできるが、やけに気配が多い。というより大きな気配に、少しだけ首を傾げた。以前より大きな魔が、世界を闊歩するようになったのだろうか。いやそもそも、魔が溢れる理由がどこにあるだろう。魔は、一定の数から揺るがないはずだ。多くもなければ少なくもならない。

「なにか感じられるようですね？」

目ざとくノルジスの様子に突っ込んだツヴァイは、ちゃんと学習しているようでノルジスの視線の先を追わない。

「感じるというより、僕は魔に近いからね。気配は、僕も魔も、似たようなものだと思うよ」
「……そういえば」
「魔王と呼ばれたくらいだからね」

苦笑しながらツヴァイに視線を戻す。複雑そうな顔をしていた。

「なに？」
「あなたは、魔術師であられる」
「そうだね」
「なぜ、魔王と？」
「そう呼んだのはきみたち人間じゃないか」

勝手に、ノルジスを魔王と呼んだのは、人間たちだ。だからノルジスは、自分を人間ではない存在だと、思うしかなくなった。いや実際に、人間とは生態が異なっているかもしれないから、人間ではないのだろうけれども。

「誰かがノルジスを魔王だと言った。だからノルジスは魔王になったんだよね」

と、セヴンが、笑いたいような憎らしいような、そんな変な顔をしながら言う。するとレヴンも、黒竜を操る手綱を握り締めながら振り向き、変な顔をした。

「ノルジスを魔王にしたのは人間だよ」

セヴンの言葉も、レヴンの言葉も、まるでツヴァイを責めているようだった。

この息子たちは、とノルジスは軽く息をつく。

いったいどこで、そんな情報を仕入れてきたのか。魔王だとか、そんな話は一度もしたことがないのに、わかってしまうなにかが自分にあったのだろうか。

「……もう一度、お訊きしたい」

「なにかな」

「あなたが魔王だというのは、本当か」

ツヴァイの問いに、ノルジスは大きく深呼吸して、微笑んだ。

「誰かがそう言ったなら、そうなんじゃない？」

今度はツヴァイが変な顔をした。

「随分と他人任せな……なんというか、投げやりな言葉ですね」

ツヴァイの言葉は的を射ていた。

「まあ、どうでもいいからね」

突っ込まれたくない、と思う。本当に、そんなことはどうでもいいのだ。

「僕は帰りたいと願っているだけだし」

びくりと、レヴンとセヴンが震え、心配げな顔を寄こした。だいじょうぶだよ、と息子たちに微笑みかけ、読みかけの本に手を伸ばす。

ずっと読み続け、先が気になる程度には面白いと思い、繰り返し読み続けている本は、幾度も手にするからもう背表紙はぼろぼろだ。紙質も、幾度も捲るから、最初はつるつるしていたのに今はざらざらとしている。繰り返し読んでいる本なら、内容も完全に覚えてしまうだろうが、眠るたび忘れてしまうから繰り返し読んでいるのであって、それでも読み終えてから眠るとまた忘れてしまう。いったい幾度この本を読み返せばいいのだろう。わからない。

「僕はもう、二度と、故郷の地を眺めることができない……」

背表紙に書かれた題名は、この世界で読める文字ではない。ノルジスだから、読むことができる文字だった。けれども、この文字も忘れてしまう。なんて書いてある本だろう、と手を伸ばして漸く、いつも忘れてしまう本だということに気づく。忘れないようにしよう、そう心がけているから、忘れても本を見れば思い出すことができる。

「思い出、なんだろうねぇ……」

その郷愁だけで、忘れないようにするのが手いっぱいだった。

「ノルジス……」

「ん。だいじょうぶだよ、レヴン、セヴン。僕にはきみたちがいるからね」

できることなら、このきらきらした息子たちを、孫だよ、といって両親に紹介したい。紹介したかった。できないのだと、わかっている今でも願ってしまうくらいに、郷里への想いがあった。

「今さら無理だけどね」

「なに……？」

「あれからもう何百年も経ったから」

諦めた、とは言い難いけれども、半ば認めてしまった。自分はもう、帰れない。人間でも、なくなった。

「……泣きたいの、ノルジス？」

「なんで？　僕はもう泣かないよ。悲しいことは、もう昔の記憶になったからね」

「泣いてもいいよ、ノルジス」

「きみが泣きそうだよ、セヴン。どうしたの」

「ノルジスが悲しそうだから。おれにわからない目で、遠くを見るから」

「おやおや。まだ子どもだね、セヴン。おいで」

泣きそうなセヴンを腕に抱きしめると、手綱を握っていたレヴンも少し場所を移動して、寄り添ってきた。なんだか息子たちが可愛らしく萎れているので、ノルジスは朗らかに笑んで息子たちを撫でた。

「魔王……なのですね」
「そう見える？」
「人間の寿命は、長くとも一五〇年。数百の年を超えることは、できません。超えることができるのは魔、そして魔を統べる王、つまり魔王です」
「……そう。それなら、僕はきっと、魔王なんだろうね」

忌み子だとか魔王だとか、そんなことはどうでもいい。ただノルジスは、帰りたかっただけだ。忌み子だとか魔王だとか、そう呼ばれない郷里に、ただ帰りたかった。半ば諦めている今でも、諦めたくない気持ちがあるから郷里に縋っている。この世界の故郷を切り離せずにいる。
ああ、早く眠りたい。眠ってしまいたい。眠ればそんな気持ちも忘れてしまうから。
目覚めたとき、それでもきっと、自分はこの世界に在るのだろうけれども。

05 ： この世界の魔。

魔の軍勢が、そこにはいた。

魔とは、すなわち魔獣のことだ。意志を持たず、理性を持たず、他の動物と同じように行動するが、数多の動物とは一つだけ異なる部分があった。破壊衝動を持っていることだ。

魔獣は破壊する。自然や動物、人間、とにかく生きているものすべてを破壊する。ときには街を、国を、森を、世界を壊そうと動く。

なぜ魔獣が存在するのか、そしてなぜ魔獣は破壊衝動があるのか、その解明は成されていない。とにかく魔獣が襲ってくるから、その対処に追われて原因など究明していられないのだ。ただ、彼らが使う力を転用することだけは考えられた。それが魔術と呼ばれる力だ。魔術を使えない者は、精霊に力を乞い、霊術が使えるようになった。進歩したと言えるだろう。だが、魔術や霊術を使っても、魔獣が破壊衝動を止めることはなかった。その数も、減ることがなかった。だから今も、人々は魔獣と闘い続けている。

ノルジスは目の前の魔獣軍に、そっとため息をついた。

こちらの声が聞こえるくらいの格がある魔獣は、どうやらいない。いや、いたとしてもこの熱気、あてられて思考力は奪われている。

ノルジスの声は届かないかもしれない。

「なんという数……っ」

「そうだね」

「これを見てなんとも思わないのですか、ノルジスさま！　あなたは魔王だろう！」

魔王、魔を統べる王、だからなんだというのだ。

ノルジスたちが魔獣の群れに遭遇したのはアルファンデスの首都に向かって五日め、中央に向かっているので都市や村の点在が多く見られるようになってからのことで、今まさに宿泊しようと考えていた騎士団の砦を前にしてのことだ。なにか様子がおかしい、とツヴァイが言って、様子を窺いながらゆっくりと降下したところで、はっきりと魔獣の群れを視認した。騎士団の砦が、魔獣の群れの進行を阻止していたのだ。

「とにかく、砦の内側へ！　応戦しなくては」

砦の屋上では、弓隊らしき騎士たちが、魔獣の群れに応戦している。砦の内側では、門が破られた際に備えてか、十数人の騎士たちが準備に追われ、忙しなく行き交っている。砦を盾にしている後ろの街では、人々が逃げるための準備もしていた。いや、もはや避難が始まっている。

「……そう。それで、怒ったのか」

「ノルジス？」

「僕は傍観するよ、セヴン。セヴンも、手を出さなくていいからね」

もちろんレヴンも、手を出さなくていい。そうふたりの息子に言うと、ツヴァイが怒った。

「あなた方は魔術師として呼ばれたのですよ！」

なぜ手伝ってくれないのだ、ということらしい。
ノルジスは、それまでできるだけ笑みを絶やすことなく過ごしていたが、このときばかりは気を遣っていた表情を無視した。
「あの声が聞こえないのなら、僕になにか言う前に、僕にこの事態の収拾のつけ方を見せてみろ」
「な……っ」
「ほら、聞こえないんだろう？　なら、きみはさっさと、竜騎士としての役割を果たしなさい」
暗に、行け、とツヴァイを促す。彼女は顔面を蒼白にしながら、しかし呆然としてもいられないので、さっと身を翻して緑竜を真っ直ぐ砦の内側へと降下させた。
「ノルジス……これはちょっと、ヤバいんじゃないの？」
「まあね。けれど、僕は傍観するよ」
「うーん……おれ、ちょっと手を貸したいなって、思ったけど」
「それなら、もう少し待ちなさい。今はその必要はないよ」
「そう？　なら言うこと聞く」
にこ、と笑んで、セヴンは頷く。レヴンも同じように微笑んで頷き、黒竜を操作して少し上空まで戻った。
「ベジ、悪いね。もう少しだけ飛んでいてもらうよ」
高速移動させているが、一日中飛んでもらっていることに代わりはないので、黒竜もさすがに疲れている。休ませてやらなければ、黒竜も可哀想だ。それでも少しだけ我慢してもらうと、だいじょうぶだよ、とばかりにきゅるきゅると鳴いた。雌の黒竜は優しい。見ているだけでいいの、とまでノルジスに訊ねてくる。

「……本当は見ていたくないよ。でもね、必要なことだから」
「なにが必要だと思うの？」
レヴンに問われて、そこで漸く、ノルジスは笑みを浮かべた。
「彼らにも感情はある」
破壊衝動があるだけで、ほかの生きものとあまり代わりがない魔獣は、その力があまりにも強いから忌避されるが、だからといって感情がないわけではない。他の動物たちがそうであるように、嬉しいときや悲しいときがある。それを上回る破壊衝動が、彼らが駆逐すべき存在とさせているのだ。
「正々堂々と戦っていれば、この争いは起きなかっただろうね」
「……もしかして」
レヴンがそれに気づいた。セヴンもそれに気づいた。息子たちは琥珀色の瞳を細めると、悲しそうに騎士団と戦っている魔獣たちを見やった。
やはり僕たちは、人間より魔に近い存在だ。魔の感情が、これほどまでに、よく伝わってくる。
「僕は魔王……なんだね」
「ノルジス……」
「魔の気持ちがわかる。ここが、痛いくらい……」
ぎゅっと、胸元を握る。
魔獣たちの感情が流れてくるようで、痛くて仕方なかった。それでも、魔獣たちを助けることができない。彼らの破壊衝動を、奪う

こともできない。魔獣の破壊衝動は本能にも近しい。やめさせることなど、できるわけがなかった。

魔王だからなんだというのだ。魔のためにできることなんか、なにもない。ただ魔の感情がわかるだけで、痛みがわかるだけで、なにもできやしない。できることがあるとしたら、それはただ一つだ。

「このためだけに魔王という存在があるのなら……人間たちはひどく歪んだ目を持っていることに、なるよね」

まあ、それでもいいけれど、と少し投げやりだ。仕方のないことだからではない。魔王だから、そう思うのだ。

そう、ノルジスは魔王だ。人々が言うように、魔王という存在は自分だ。かつて人間であり、人間のように感情や理性があり、葛藤し矛盾する生きものだ。魔王は自分だ、と今なら思う。

いや、こういう光景を見るたび、思ったことだ。

「魔王は悲しいね……ノルジス」

「うん、悲しいよ」

「人間はそれを、わかってくれないけどね」

「きみはわかるだろう、レヴン」

「セヴンもわかってるよ、ノルジス。おれたちは、ノルジスの息子だからね」

優しく笑む息子たちに、親としてというより、一緒に生きるものとして、涙が出そうになった。

「きみたちは本当に、僕を甘やかすのが上手だね」

「そのためにおれたちがいるんだよ、ノルジス」

息子たちがいてよかったと、わが子がいてよかったと、ホッとしながらノルジスは深呼吸し、笑みを取り戻すと黒竜の背をぽんぽんと撫でた。

「もういいよ、ベジ。お疲れさま」

首を振り向かせた黒竜は、本当にいいの、と心配していた。だいじょうぶだよ、と声をかけると、黒竜はゆっくりと降下を始める。

「おれたちが行くよ、ノルジス」
「そうだね。けれどその前に、声をかけてもいいかな」
「騎士たちに姿を曝すことになる。忌み子だって、ノルジスが罵られるのはいやだよ」
「僕は魔を統べる王だよ、セヴン。相対したなら、声をかけるべきだろう？　それが敬意というものだ」

でも、と渋るセヴンに、だいじょうぶだから、と言って。

「竜騎士さん」

砦の門で魔獣に剣を向け、多くの騎士に指示を出したり出されたりしているツヴァイの横に降りると、ツヴァイが騎乗している緑竜に下がるよう伝えた。

「ノルジスさまっ？　ララファ、こら下がるな！」
「竜騎士さん、伝えてくれるかな」
「はっ、ノルジスさま？」
「僕らが行く。巻き込まれないよう、下がりなさい」
「な…っ…無茶です、ノルジスさま！　ノルジスさまっ！」

ツヴァイのほかにも緑竜に騎乗している竜騎士はいて、ノルジスとセヴン、レヴンが黒竜から降りると緑竜たちが視線を寄こした。ツヴァイの緑竜に伝えたように、下がるよう、言葉をかける。するとすぐにノルジスの存在を把握した竜たちは、あるじの竜騎士たちがいきなりのことに戸惑うのも無視して、全員が下がり始めた。

「なにが起きた！」

「竜たちが命令をきかない！」

「なにを恐れた、おまえたち！」

竜騎士、そして騎士たちが、各々状況に混乱していたが、ノルジスが前に進み出ていくと魔獣たちもなにかを感じて少し下がったので、ほんの僅かだが静寂がその場を包んだ。

「レヴン、セヴン、おいで」

生じた静寂、そして空間に、ノルジスは息子たちと躍り出る。持っている色を隠す目的のあった灰色の外套は、巻き起こった風で頭巾が払われ、ノルジスの黒髪と黒い双眸、レヴンの銀髪と琥珀の双眸、セヴンの金髪と琥珀の双眸を露わにした。

誰かが息を呑んだ。

「忌み子……と、愛されし子？」

誰かがそう言った。

「そう……この世界で、レヴンとセヴンは世界に愛されし子。魔王が存在するなら、聖王も存在する」

嫌われる存在があるなら、愛される存在もある。その道理は確かにあって、レヴンもセヴンも、世界に愛される。
息子たちに、そういう存在であれと願って、本当によかったと思う。ただ、当人たちは、そのことにあまり興味はないようだが。

「ノルジスだって、愛されし子なんだよ？」
「ノルジスは忌み子ではない。魔王、だからね」
「おれたちがふたりで聖王であるように、ね」

セヴンが、レヴンが、にっこりと微笑んでノルジスの背を押してくれる。

「可愛い息子たちだ」

ふふ、とノルジスも微笑むと、その慈愛に満ちた瞳で、動きを止めた魔獣たちを見つめた。

「疲れたね」

そう、声をかけた。

「もう、休もうか。きみたちの声、僕は聞いたよ。聞こえたよ。とても……とても、悲しかったね」

行こう、と魔獣たちを促す。
もうここにはいられない、いてはいけないのだと、教える。

ぐるる、と低い唸り声がした。

「僕たちの手を貸そうか？」

べつの場所から、また低い唸り声がする。
ノルジスは少し眉をひそめたが、小さく息を吐き出すと、仕方ないね、と肩の力を抜いた。

「レヴン、セヴン、頼んだよ。僕は力を出せないからね」

もし、起き続けている今の状態でなければ、この手を魔獣たちに貸すことができたのだけれども、もしたとえ体力が充分にあったとしても、魔獣たちにとって一番の選択をさせてやることはできなかったと思う。

「だいじょうぶだよ、ノルジス。おれたちは、ノルジスの息子なんだから」
「心配しなくていいよ、ノルジス」

今この場は、息子たちに任せるのがいい。いや、その選択をできる今の状態が、相応しいと言える。
魔獣たちの苦しみを長引かせることはないのだから。

「おやすみ、いとしき魔よ」

レヴンが、セヴンが、それぞれ力を解放する。ふたりの足許には光りの陣が浮かび、その陣は魔獣たちを取り囲むように増えていく。
レヴンとセヴンの姿に騎士たちがざわめいた。魔術師だと気づいたのだろう。それも、ただの魔術師ではないと気づいたはずだ。魔獣の群れに、たったふたりで、しかも恐ろしい数の陣を敷いていくのだ。

魔獣たちを完全に取り囲んだ陣は、一度その光りを弱め、だがレヴンとセヴンが一言詠唱すると、眩しい光りとなって拡散した。

「おやすみ」

息子たちが発したもう一言で、拡散していた光りが一つに収束する。そうしてふっと光りが消えると、そこにはもう魔獣の姿など、欠片も残っていなかった。

「またいつか、どこかで逢おうね」

魔の消滅は、欠片も残らない。彼らの消滅は、なにも残さないのが通例だ。血を流すこともない彼らは、戦いの痕跡だけ落として、姿を消す。その存在を、奪われるかのように。

「ノルジスさま！」

「……手を出すつもりはなかったんだけどね」

再び訪れた静寂を割るように、ツヴァイが動かない緑竜から降りて、こちらに駆け寄ってきた。

「あまりにも声が悲惨だったから、つい、ね。申し訳ないことをした。きみたちの活躍の場を奪ってしまったね」

「そんなことはありません！　すごい……力でした」

「僕はなにもしていない」

「そうかもしれませんが、魔獣たちはあなたの声を聞いていた……それに、セヴンどのとレヴンどのが」

「息子たちは、見てくれのとおり、世界に愛されし子だからね」

「本当に……？」

「ここでの嘘には意味がない」

「金と銀の双子……」
「中身はともかく、見てくれはそっくりだよ。気づかなかったの？」
「あ、いえ、そうかとは考えていたのですが……レヴンどのは学校の先生、セヴンどのは学生と聞いたので」

この竜騎士は自分たちの言葉をきちんと理解していただろうか。何百年も生きていると、言ったのは、ノルジスだけがそうだからではない。ノルジスの息子たちも、同じくそれくらいの年月を経ている。たまたま今は学校に通わせていただけだし、数十年ごとに学校には通わせている。生きるのにお金は、学歴は必要なのだ。そのために、学校へはきちんと通わせていたのである。今回レヴンが学校の先生になっていたのは先に卒業していただけで、セヴンは時期をずらして学校に入学させていただけのこと、同じ顔でも兄弟であるならべつに双子だと言わなければ、歳の差などわからなくなる。そもそも双子でも、レヴンとセヴンの場合は外見だけがそうであって、中身は似てない。ノルジスへの愛だけは同じだが、それだけだ。

「僕は息子たちより二十五歳上ってだけで、この子たちも僕と同じくらい生きていることに変わりはないよ？」
「そ……そうでしたか」
「息子だって言ったでしょうが。それとも疑ってるの？　まあ疑われても仕方ないけど。この見てくれの違いじゃあね」

そういえばツヴァイは初め、ノルジスとセヴンの親子関係を疑っていた。セヴンが似てなくてよかったと言ったせいか、その疑いは持ち続けられていたらしい。

「似てない親子だから仕方ないけど、おれは間違いなくノルジスの子どもだよ？」
「おれも……生まれたときから一緒にいるからね」

「ああ、レヴンって無駄に記憶力いいよね。生まれた瞬間から記憶あるんだっけ？」
「うん。ノルジスが、ものすごく嬉しそうな顔してたの、憶えてるよ」
「うわぁ。おれもその顔憶えてたかったなぁ。ま、いろいろと見てきたから、その分は補ってるけど」

間違いなく、親子である。むしろ、ノルジスとしては、本当に親子だろうか、とは疑えない。確かにこの子たちは生まれてきたのだ。わが子、として。そしてノルジス自身、息子たちが生まれたその瞬間に、父性を感じた。
レヴンとセヴンは、間違いなくわが子である。

「その魔術師たちは親子関係にあるのか」

ふと、どこからかそんな声が湧いてきて。

「まったく似ていないな」
「フェリ殿下！」

声に振り向いたツヴァイが、慌てて膝を折り、騎士の礼をした。ツヴァイの敬礼を受けた人物は、どうやら、ノルジスたちをここまで呼んだ当人であるようだった。

「初めまして、トーエイの森に住まう魔術師どの？」

空色の双眸が、肩より下まで伸ばした薄茶色の髪を風になびかせながら細められる。

「わたしはアルマ・フェリトワ・アルファンデス。フェリと呼ばれ

ている。そう呼んでもらえるだろうか」

外見はノルジスと同じくらい、つまりそれはレヴンやセヴンと同じくらいなわけだが、この目の前の王族は外見のままの年齢だろう。成人したか、まだ少し先か、それくらいだ。魔術師を統率していると聞いたが、そのわりには静かでおとなしそうな、読書でも好きそうな穏やかさがある。荒々しさなんて欠片もなく、王族というより貴族の子弟といったほうがしっくりくるのは、偉ぶっていない様子からだろうか。

「名前をお訊ねしても？」

「……どうして僕から目を反らさないかな」

「トーエイの森に住まう魔術師は、黒髪黒眼の忌み子でもあると、文献に残っている。あなた方の中で、その容姿を持つのはあなただけだが？」

「……そんな文献あるのかよ」

その文献燃やしてこようか、と言ったのはノルジスではなく、セヴンとレヴンだった。

「レヴン、ちょっと行ってこようか」

「うん。とりあえずお城燃やせばいいかな？」

「それはやり過ぎ。ああでも、どこに文献があるかわかんないしね。まあいいか」

不穏なやりとりを始めた息子たちを止めたのは、もちろん城に居をかまえるフェリトワだ。

「待て待て。文献は貴重なんだ。なにか気に喰わないところがあったなら、その部分だけ削除させよう。文献を燃やすのはやめてくれ

ないか」

城は燃やされてもいいのか。思わず突っ込みそうになったがやめておく。

「貴重だといいながら、文章は改竄してもいいの？」

「あなたの気分を害すものであることは確かだろう」

「僕はべつに、忌み子と呼ばれても気にはしないよ。僕の見てくれはこのとおり、忌み子だからね」

「だが、だからといってそう呼ばれて、嬉しいわけがない。もともと削除するつもりでいた部分だ。改竄など気にしないで欲しい」

まるで人間の鏡だな、と思った。正義感が強いのか、それともただの偽善者なのか。

微妙な王族だな、僅かに警戒を抱きつつ、ノルジスは身体の支えを息子たちに頼んで、トーエイの森からここまで来ることになった原因をしばらく眺めた。

06 ： この世界の魔王にする。

「ノルジス？」
「立ってるのつらい」
「ああごめん、おぶろうか」
「お父さんだから遠慮する」
「おれは大歓迎だよ」

さあ来い、とばかりにレヴンが両腕を広げている。いや待て、と咄嗟に突っ込めた自分を褒めたい。そしてきちんと自分の足で立った自分の気力を思い切り褒めてやりたい。

「なにそのポーズ」
「なにって、おぶるポーズ」
「それ女の子用だよね。明らかにお父さん用じゃないよね」
「このほうがいい」
「……。きみは僕をなんだと思ってるの？」

明らかにお姫さま抱っこしようとしているレヴンに、ノルジスは半眼する。
過保護とかそういう問題の前に、この息子はちょっと思考回路が危ないかもしれない。

「レヴンがいやならおれが抱っこするよ？」
「抱っこって言ったね、抱っこって。僕はおぶって欲しいんだけど、

セヴン？」
「同じようなものでしょ」
「まったく違うんだけど。きみたちお父さんで遊んでなにが楽しいの？」
「レヴンが駄目ならおれでいいでしょ」
「きみもレヴンも僕の子どもだからね？　僕はきみたちのお父さんだからね？」

この息子たちは自分を本当に父親だと認識しているだろうか。ただただ護らなければならない雛鳥なんて時期はもうとっくに終わっているのに、まるで自分が歳下の弟になったかのような勘違いをしそうで怖い。

べしべしと息子たちを叩いて、レヴンの背中を漸く獲得したとき、ふとフェリトワと目が合った。

「……なにかな、王子サマ」
「フェリと呼んでくれてかまわないが」
「うん、なにかな王子サマ」
「……。本当に親子なのか？」

疑問はそこか、と思わず心で突っ込む。似てない親子だというのは、言われるまでもなく承知していることだ。

「僕をトーエイの森の魔術師だと言うなら、僕がどう呼ばれていたかもわかるでしょ」
「魔王、と……呼ばれているな」
「何年経ったと思ってるの。いるよ、子どもくらい。子どもがいて悪いの？」
「いや悪くはないが……真に魔王なのか？」

「きみたちが僕をそう呼んだんだろ」

俄かに呆気に取られていた様子のフェリトワが、明らかに複雑そうな顔をした。

「今のあなたは魔王に見えない……だが、魔王に見える」
「そう思うなら、そうなんじゃないの」
「では、魔王だと思っていいと？」
「思いたいなら思えばいいよ」
「あなたを封じるために勇者は召喚された」
「あ……」

そういえば、すっかり忘れていたが、勇者なるものが召喚されていた。

「なに、僕ってば封印されるわけ？　なんにもしてないのに？」
「あなたが噂の通り、行動していれば」
「僕のどこにそんな気力があるように見えるの」

世界征服だとか、国家転覆だとか、暗黒世界を築こうだとか、そんなことを考えているように見えるのだろうか。そんな面倒なこと、というか興味もないこと、生まれてこのかた考えたこともないのだが、そんな雰囲気が身から滲み出ているのだろうか。出ているとしたら自分が可哀想だ。やっぱりあの森から出るべきではなかったかもしれない。

「どれだけ僕は嫌われたらいいんだろうね、まったく……」

若い頃が懐かしい。あの頃は、嫌われることが理解できなくて、悲しくて、寂しくて、嫌われないようにするためにいろいろなこと

をした。人に好かれる努力をした。
だから、トーエイの森の魔術師が生まれた。
その過去が、今になって仇として返ってきている気がする。
「あなたにとって勇者の召喚は脅威ではないのでは？」
じっとこちらを見つめてくるフェリトワに、ノルジスは同じ強さで見つめ返した。
「逃げるからね」
「逃げる？」
「殺されるのは御免だよ」
なにを当たり前なことを言わせるのだろう。
「今回、僕がここまで来たのは、息子たちのためだ。長男がとちったおかげで、隠れ蓑の結界が壊れて、そこの竜騎士さんを招いてしまったからね。あとは……そうだね、勇者の召喚が必要な魔王がどんな奴か気になって」
「？　魔王はあなただろう？」
ノルジスは大袈裟なほど大きく「はぁぁ」とため息をつき、レヴンの背中でぐたっと全身の力を抜く。いきなり弛緩したノルジスに、怪力のレヴンはびくともしない。その筋力が羨ましいなんて思わないことにしているから気にしない。
「噂の魔王が僕なら、のこのこ表に出てくるわけないだろ」
「……それはそうだが」
「僕はきみたちが言うところの魔王だろうけどね、噂の魔王ではないんだよ。同一人物に見なされるのは非常に迷惑だ。なぜ僕がそん

な、くだらないことをしそうな魔王の代わりに殺されなくちゃいけないわけ？　僕は慎ましく、息子たちの成長を眺めているだけなのに。むしろもう孫が欲しいくらいだよ。残念な息子たちだからお嫁さん来てくれないけどね」

本当に残念なことだ。きらきらした容姿は随分と女性にうけるようであるから、それが羨ましいなんて思わないことにしているけれども、モテてもおかしくないはずだという確信はある。

「ノルジス、一言余計だと思うよ、うん」
「セヴン、僕は孫が見たいんだよ」
「残念。おれまだ学生だから。世間で言うところの未成年だから」

のうのうと年齢を偽る息子に顔が引き攣る。まあ学校に通わせているのは事実だ。

「このままだと僕、孫が見られないのか……？」
「おれたちにその気はないからね」
「頼むからお嫁さんもらってよ。嫁舅戦争とかしてみたいよ」
「ああ、ノルジスの取り合い？　負ける気がしないね」
「違うよっ？」

結婚生活を別方面に捉え嬉々としたセヴンにがっくり肩が落ちる。この子たちいったいどれだけお父さん大好きなの、と自身の子どもが嫁をもらえるか心配でしょうがない。

「……親子だな」

フェリトワが遠い目をしていた。反応がツヴァイっぽい。

「ねえ王子サマ、この可哀想な息子たちにお嫁さん紹介してくれない？」
「……協力はしよう」
フェリトワからいい返事をもらった。レヴンもセヴンも迷惑そうな顔をしたけれども、子どもから自立できなくても孫は見たいノルジスとしては、息子たちの文句など聞こえない。
さて、と一息つくと、改めて召喚されたという勇者のことを考える。
「ねえ王子サマ。きみは僕をどうしたいの？」
「……どう、とは？」
ハッとわれに返ったっぽいフェリトワが、ノルジスの問いに半歩遅れながら首を傾げる。仕草が優雅だ。
「そこの竜騎士さんにね、ついて来ないとあなたを魔王だと報告しなければならないと言われたわけ。けっきょく僕は自ら魔王だと名乗ったようなものだから、その脅しに意味はなくなった。まあ僕は、噂の魔王の真相を知りたいだけだから、べつに竜騎士さんに脅されなくても出向いたと思うけどね」
きみの思考にも興味はあるのだけれど、と付け足すと、フェリトワは少しも考えることなく口を開いた。
「魔王の真相をわたしも知りたいと思った。だからあなたには、出向いてもらう必要があった。トーエイの森に住まう魔術師どのが真に魔王であるのなら、噂の魔王はわが国に敵対する存在だからな」

やはり、ツヴァイからそう感じたように、フェリトワも魔王という存在を殺すつもりでいたわけではないようだ。

「僕をどうする？」
「魔術師として招きたい」
「なぜ？」
「あなたは魔術師だろう？」
「その前に、魔王、らしいけど？」
「それでもあなたは魔術師だ」

なるほど、とノルジスは唇を歪める。魔王として存在を認めるよりも、魔術師として存在を認めたほうが、フェリトワには都合がいいのかもしれない。

「現存する魔術師の数は？」
「一個大隊、というところだな」

数が少ない。それならノルジスを魔術師として認めるほうが、フェリトワとしても、アルファンデスの国としても、明らかに都合がいい。ノルジスは魔王であると同時に魔術師でもあるのだ。魔王としての力の大きさは、魔術師の中で最強と言えるだろう。力を欲している、と考えるのが妥当だ。

「悪いけど、招かれるつもりはないよ」
「では訊く。なぜ？」
「僕の願いはこの世界に聞き届けられない」
「ならば、なぜここまで来たのだ」
「息子たちのため、噂の魔王の真相を知るため。魔術師として招かれるつもりはないよ」

フェリトワの視線が、ノルジスからレヴン、そしてセヴンに移動する。

「あなた方を招くことは可能か」

フェリトワからの、頼むというより強制しているような雰囲気に、レヴンは無表情、セヴンはにっこりと微笑んでいた。

「いくら出せる？」

「……、は？」

「だから、いくら出せるの？」

問うたのは、もちろん笑っているセヴンだ。

「なんのことだ？」

「決まってるだろ。おれたちの給料だよ。いくら出せる？」

収入の話を切々と息子たちに語るべきではなかったかもしれない。フェリトワが面白いくらい空色の双眸を真ん丸にしている。

「そこらの魔術師と一緒にされたら断る。おれとレヴンの力、見ただろ？　欲しいなら、見合った額の給料くれないと」

「……給料に、よると？」

「当たり前だよ。生きるのにお金は大事なんだ。ねえレヴン？」

こくりと、レヴンが頷く。

「ノルジスに裕福な生活をさせるためには、それなりの額が必要だからね」

いやべつに、贅沢な生活を望んでいるわけではないのだけれども。むしろ平穏静かな生活を送れたら、あと孫と遊んで嫁いびりができる環境であれば、とくに問題はない。

フェリトワが可哀想な顔をしていた。

「いくら必要だ」

交渉始めちゃったよ、よっぽど魔術師に苦労してんだな、と思った。

まあいい。

ノルジスは魔術師として招かれるつもりはないし、息子たちは国仕えの魔術師になると意気込んでいる。息子たちの邪魔をするつもりはない。

フェリトワと交渉を始めた息子たちにため息をついてから、ノルジスは呆気にとられたままのツヴァイを見やる。

「竜騎士さん」

「え……あ、はいっ」

「きみの望みは叶ったかい？」

問うと、ツヴァイはこれまた大きく目を見開いた。

ノルジスは笑った。

「よかったね、望みが叶いそうで。いや、もう叶ったのかな」

全身をきらきらと輝かせたセヴンが、徐々に萎れていくフェリトワに満面の笑みを浮かべている。交渉は上手く進んでいるのだろう。フェリトワは提示された給料の額に、しかしこれも仕方ないと思っ

ているのかもしれない。金さえ払えば力の強い、それも世界に愛されし子の魔術師をふたりも手に入れられるのだ。おまけに、そのふたりには魔王という父親がいる。魔術師の数が少ない現状で、咽喉から手が出るほど欲しい人材には違いない。

「だから……その脅しは、もう必要ないよ？」

「！　こ、これは違……っ」

ずっと剣に手が伸びていたが、ツヴァイは慌てて柄から手を放した。

殺すつもりはないのだろうけれども、それでも魔王という存在は、人間たちには魔と等しく、いやそれ以上に恐怖の対象だから仕方ない。無意識的な警戒心だと、わかっていても物騒だから、ノルジスはやんわりと微笑んだ。

「きみに僕は殺せないよ。でも、危ないから、僕の前でそれを握らないほうがいい」

剣なんか怖くない。
騎士なんか怖くない。

勇者なんか怖くない。
人間なんか怖くない。

怖いのは。

怖いのは。

自分を魔王にするこの世界。

それ以外はなにも怖くない。

「怖くなんか、ないけどね……」

07 ： この世界の竜たち。

力なくよろめきながら歩くフェリトワを少し可哀想に思いつつ、砦の客室に案内された。ひとまず今日のところはは休むことになったのだ。

ノルジスは場所をレヴンの背から寝台の上に移動し、大の字に四肢を放り投げる。セヴンは夕食の準備に厨房へ行ったので、靴を脱がせ靴下も脱がせるなど世話をしてくれたのはレヴンだ。

「眠らないの？」

ぼんやりと天井を眺めていたら、レヴンにそう訊かれた。

「眠っていいの？」

問い返すと、レヴンは少し困ったような顔をして、それから苦笑した。

「ベジから荷物、下ろしてくる」

解釈としては、眠らないで欲しい、ということのようだ。

「いってらっしゃい」

強い眠気は、吐き気や頭痛、眩暈を起こす。それに耐えながら、

部屋を出て行くレヴンを見送り、ひとりきりになると瞼を閉じた。
このまま眠ってしまいたい。
けれども眠ってはいけない。
いつになったら眠れるだろう。
いつになったら。
考えるのは、眠ることばかりだ。眠いという本能が訴えてくるから仕方ない。
はあ、とノルジスはため息をついた。今ので幸せが随分と逃げた気がする。いや自分は、ため息のせいでいくつもの幸せを逃していると思う。おもに息子たちのせいで。

「ノォール！」
「！　はいっ？」

大声でいきなり呼ばれて、驚いて飛び起きる。入口付近で、お盆に食事を乗せて運んできたらしいセヴンが、ノルジス以上に吃驚したような顔をして立っていた。

「な、なにごと？」
「……ノォール？」
「なによ」
「……びっくりした」
「いやこっちの台詞だよ」

お父さんを吃驚させてなにか楽しいですか、と言おうとして、セヴンの様子がおかしいことに気づいた。

「セヴン？」
「……いや、寝ちゃったかと思って」
「まだ眠る気はないよ。なに、どうしたの」

ゆるり、と足を動かして部屋に入って来たセヴンは、お盆を卓の上に置くと寝台に近づいてくる。その顔はどこか青褪めていて、セヴンらしくない姿にノルジスは首を傾げた。

「ぜんぜん動かなかったから……吃驚した」
「ああ、考えごとしてたからね」
「考えごと？」
「眠いなぁって」

なんだろう、とセヴンの様子を疑問に思いながらも、ノルジスは再び寝台に転がる。すぐにセヴンの手が伸びてきて、ごろごろできなかった。

「夕食だよ、ノォール」
「少しごろごろしたいぃ……てゆか、その呼び方はやめなさい」
「起こすときはこっちのほうがノルジスの反応がいいもん」

ほらほら夕食だよ、と腕を引っ張られたら、仕方ない、寝台と少しの間お別れしなければならない。

「今まで泊まったどの寝台よりも軟らかくて気持ちよかったのにぃ」
「もっといい寝台、用意してあげるから」

とてもいい言葉をもらった。

「そういえば、お給料はどれくらいもらえることになったの？」

部屋に案内してくれたときのフェリトワの様子を思い出して、いったいどれだけ毟り取られることになるのやら、と思っていたが、

案の定ノルジスが子離れできない息子はにんまりと、とてもいい笑顔になった。

「これくらい」

すごく嬉しそうに、すごく楽しそうに、指が二本立てられた。

「ん？」

「二倍」

「……と、いうと？」

「人生が二倍楽しめちゃうくらい」

つまりどれくらいよ、と突っ込んだが、セヴンはにやにや笑うだけで、夕食の支度を整えていく。

給料は気になったが、それよりも先ほどまで青褪めていた顔色が回復したセヴンに、ノルジスはホッとした。

そうして、再びフェリトワの後ろ姿を思い出した。人は後ろ背でものを語ることがあるけれども、先ほどのフェリトワは確かに後ろ背でいろいろなことを物語っていた。

「可哀想に、王子サマ……」

おそらく破格の給料を支払うことになっただろう。セヴンの笑顔がそう物語っていた。

だがしかし、同情はしない。そのくらいの給料をセヴンレヴンはいただいて当然だ。ふたりは世界に愛されし子、そしてひとりでも国の一つや二つは転覆させられるくらいの力がある魔術師だ。安い買いものをしたと思って欲しい。

「ただいま。ねえノルジス、ベジの様子がおかしいんだけど、理由

わかる？」

どれだけ裕福な生活が待っていることやら、とノルジスもニヤニヤし始めた頃、黒竜から荷物を引き上げてきたレヴンが困り顔で帰って来た。

「ベジがどうしたって？」

「様子がおかしいんだよ。なんか……そわそわしてる？」

黒竜の様子が、どうもいつもと違うらしい。窓から外を見やると、肩に乗れるくらいの大きさに縮んだ黒竜がぱたぱたと飛んで、あっちへ行ったりこっちへいったりと、忙しなく視界に入ってくる。

ちょっと考えた。

「……。ああ、そうか」

「思い当たることあるの？」

ぽん、と手を叩いて窓辺に行き、鍵を開けて窓を開放する。こちらに気づいた黒竜がそばに寄って来た。

やっぱり、とノルジスは微笑む。

「いいよ、行っておいで。久しぶりだもんね。どうせだから連れて来たら？　しばらくこっちにいるからね」

声をかけると、黒竜の可愛らしい真ん丸の双眸がきらきらと輝いた。きゅるきゅる鳴くと、踵を返してあっというまに空の向こうへと飛んでいく。

「え？　ベジ、どこ行ったの？」

窓を閉めると、食卓につく。首を傾げている息子たちに、苦笑した。

「きみたち、忘れているね」
「なんだっけ？」
「ポンがいるでしょ、こっちに」
「ああ！」

息子たちが思い出した。

「そっか、ポンがいるんだ。ということは、もしかしてラダさんもいる？」
「一緒にいれば、まあラダさんもいるだろうね。けど、ラダさんはポンと違って自由だからね。もしかしたらいないかも」
「ベジのあの様子からすると、いそうな気もするけど……連れて来てくれるかな？　来てくれたらちょっと心強い」

来てくれるかな、というより、来るに違いない。そう話しながら夕食を済ませ、風呂をもらい、さあ寝ようかと支度を始めた頃、突然と部屋の窓になにかが激突したような音がした。繊細な窓の硝子が割れなかったのはきっと奇跡だ。

「すっごい焦って登場したね、ポン……」

窓に激突したのは、一匹の小さな白竜。顔面衝突したのだろう、痛そうに鼻先を小さな手で押さえて悶えていたが、窓が開けられてノルジスが顔を出すと、とたんに目を輝かせて胸元に飛び込んできた。

「うわっ、なにその感激の仕方」

ぐりぐりと顔を摺り寄せてくるその姿は可愛らしい。あとから、出かけていた黒竜も帰って来て、ノルジスに懐く白竜の姿を見て目を見開き、慌てたように同じく飛び込んできた。

ノルジスの胸に、白黒二匹の小さな竜が懐く。

「すごく美味しいなにこの光景……なんかちょっと羨ましいんだけど」

二匹の竜に懐かれていたら、セヴンとレヴンに羨ましそうに見られた。

いやそんな、羨ましそうに見られても、これちょっと呼吸が苦しくなるくらい実はきつい懐かれ方なんだけど、とノルジスは顔を引き攣らせる。

傍から見れば微笑ましい光景かもしれないが、ちょっと見方を変えて考えてみて欲しい。竜の鱗は強固なのである。小さいとその鱗はいくらか軟らかくなるが、それはこちらの感覚が小さくなったというだけで、けっきょくのところ武器にもなる竜の鱗が強固であることに変わりはない。つまり、こんなに激しく懐かれたらふつうに皮膚が痛いわけである。

「ちょっとポン、離れなさい。ベジ、きみも解剖されたいの？」

いっそ二匹揃えて解剖してやろうか、と言ってやると、言葉が理解できる賢い二匹の竜はさっとノルジスとの距離を作った。賢明な判断である。

「解剖してあげるのに」

恨みがましく見やると、やめてヤメテ、と二匹の竜から声が聞こ

える。ぶるぶると首を左右に振ると、黒竜がレヴンの頭に、白竜がセヴンの頭に移動し、ちょん、と乗る。どうやら息子たちを味方につけるつもりらしい。

「ポン、きみおとなでしょ。セヴンに逃げるって、おとなのすること？」

白竜は、おとなである。もちろん黒竜もおとな、つまり成体であるが、黒竜よりももっと長く生きているのが白竜である。むしろ白竜は老体に近いかもしれない。

セヴンに逃げるとはおとなのすることか、と責めてみたものの、小さくなって可愛らしい竜になっている白竜は、それがどうしたと言わんばかりに目を輝かせ、ノルジスの言葉を聞こうとしない。

ふん、とノルジスの顔も引き攣る。

だから訊いてやった。

「……ポン、ラダさんは？」

そのとたん、かちん、と白竜が硬直する。

はん、とノルジスは笑ってやった。

「なに、また逃げられたの？」

ぎぎぎぎ、と壊れかけの機械人形のような動きをした白竜は、ノルジスににやりと笑われると、ぷくぷくと目に涙を浮かべ、セヴンの頭から降りるとその胸にひしっとしがみついた。

「あ、ノルジスがポンいじめたから、拗ねた」

よしよし、とセヴンは暢気にも老体に近しい白竜を撫でる。

ほんとはそんなに可愛い歳の竜じゃないんだけどね、と言ったところで、白竜が小さい間は可愛らしいから小憎たらしい。虐めちゃ駄目でしょ、と息子たちに窘められた日には、本気で解剖してやろうと準備をしたものだ。もちろん準備を終えた瞬間に白竜には逃げられたので、残念ながら今日まで白竜の解剖は成功していない。非常に残念だがこれは仕方ない。逃げられたら捕まえるのが大変なのだ。罠を仕掛けておかなければ白竜は捕まえられないし、今日のように黒竜に連れて来てもらわないと無理である。それに、白竜も黒竜と同じように身体の大きさを自由に変えられるので、巨大化したときは黒竜よりも大きくなる。その姿は勇ましく、威厳があり、経た年月を強く感じさせるのだが、身体を縮めるととたんに可愛らしくなるから少々腹が立つのだ。黒竜のように素直な性格であれば、素直に可愛がったかもしれないけれども。

「そのうち解剖してやる……」

ぼそっと呟くと、それは白竜に言ったつもりだったのだが、黒竜までぎくりと怯え、ころんとレヴンの頭から落ちるとその胸にしがみついていた。息子たちの胸は竜たちに大変人気である。

「ねえノルジス、ポンが来たし、おれがポンの騎乗主でいいかな？」
「いいんじゃないの。僕にはラダさんがいるからね」
「ラダさん来た？」
「僕が呼べばラダさんは来てくれるよ」

息子たちを味方につけた白竜に、おとな気なく、にんまりと笑ってやる。振り向いた白竜は、がんっ、とショックを受けたような顔をしていた。

表情筋がないように思われがちな竜だが、ノルジスが知る限り、彼らの感情は非常に豊かで、それでいて激しい。竜たちの言葉を理

解できるせいかもしれないが、彼らはころころと表情を変える生きものだと思う。特に白竜や黒竜は顕著にノルジスの言葉に反応し、表情がよくわかる。

ノルジスは開け放たれたままの窓に手をかけると、夜空を見上げる。今日は雲一つなく快晴で、星がよく見えた。

「ラダさぁーん、逢いたいよー」

と、声を外に発して数分、夜空の星が一部、強く輝きを増す。それは徐々に大きくなり、やがてその姿が小さな竜の姿をしていることがわかってくる。

半月を小さな体に反射させた竜は、目にも鮮やかな銀竜。

「ああ、やっぱり近くにいたんだねえ」

ノルジスは両腕を広げ、こちらに向かってくる小さな銀竜を迎え入れる。脳に直接響いてくるような声で、「呼んでくれたのねわたくしのノルジスーっ！」と、大音量で叫ばれた。耳がきんきん、いや、脳みそがぐらぐらさせられた。

「ら、ラダさん、ちょ、すごい感激の仕方……っ」

白竜の比ではない感激の仕方に、身体がふらついた。突進された衝撃もあって、そのままふらふらと寝台の端に腰が落ち着く。

「お、おね、お願いがラダさん……その、声、ちょっと落ち着かせて」

ノルジス、ノルジス、と叫ぶ銀竜の艶やかな鱗を撫で、落ち着い

てくれと頼む。胸に抱きついて感激していた銀竜が、はっと慌てたように顔を上げ、胸から這い上がって顔面にしがみついてきた。

「ちょ、息！　ラダさん！」

だいじょうぶ、と心配してくれるのは嬉しいが、その心配の仕方もちょっと問題だ。べりっと顔から剥がして、無意味に上がった息を整える。目をぱちくりとさせた銀竜に悪気はない、から、困る。無駄に疲れた。

「相変わらずノルジスは竜にモテモテだよねぇ」

羨ましげに言うセヴンに半眼した。

「ひとのこと言える？」

白竜にひしとしがみつかれてなにを言うか。ノルジスに呼ばれたら即座に現われた銀竜に、ぴぎゃぴぎゃとおとな気なく文句を言いながら泣く白竜は、セヴンが大好きだ。もちろん黒竜は静かなレヴンが好きで、それでいくとノルジスは銀竜に一番に好かれている。親子そろって珍しい色の竜たちに懐かれていることに違いはない。

「それでも、ノルジスが一番好かれてるよ」

まあ確かに、白竜も黒竜も、銀竜のように逢えば真っ先に胸に飛び込んでくる。虐められようとも懐いてくる。突き放しても戻ってくる。呼べばこのとおり、一瞬にして来てくれる。

慕われるのは素直に嬉しいノルジスなので、まあそうだけど、と笑った。

この世界の竜たちはノルジスに優しい。それは、ノルジスが寂し

く悲しく思ったこの世界で、唯一救いと希望になったことだった。

「久しぶりだね、ラダさん。僕を忘れないでいてくれて、嬉しいよ」

ノルジスは両手に持った銀竜を、最初に自分を愛してくれた竜を、自ら胸に抱きしめて撫でた。きゅる、と鳴いた銀竜は、「わたくしのノルジスだもの」と、擦り寄ってきてくれた。

０８　：　この世界に望むこと。

親子揃って竜を抱えていると、フェリトワとツヴァイが目を真ん丸にした。

「増えてないか？」

というフェリトワの問いに、見ればわかるだろ、と言っておく。ノルジスの肩には銀竜が乗り、レヴンの頭には黒竜、セヴンの腕には白竜がいる。明らかに増えているのだから見ればわかるはずだ。

「黒竜を見たときに思ったが……随分と珍しい竜に好かれているな」

「やっぱり黒竜って見かけないの？」

「見かけない、というより……存在しているとは思っていなかった、かな。白竜や銀竜も、見かけることもあるがそれすらも貴重だ。そもそも、人に懐く種類の竜ではない」

黒竜はともかく、白竜も銀竜も見かけるのは珍しい。ノルジスは当たり前のように逢うから気にならなかったが、やはりそれも珍しいことのようだ。

「ベジはまあ、僕もベジ以外の黒竜は見たことがないし……やっぱり解剖したいな」

ちらり、と黒竜に視線を送る。びくりと震えた黒竜は、レヴンの

後頭部に逃げた。

「名前があるのか」

「ベジ？　うん、みんな名前あるよ。まあ、僕がつけた名前だけど」

「黒竜は？」

「ミックスベジタブル。略してベジ」

「……、は？」

「白竜はフルーツポンチ、略してポン。銀竜はフルーツサラダ、敬意を込めてラダさんと呼んでる」

それぞれ紹介したら、フェリトワもツヴァイも沈黙した。たぶん意味がわからなかったのだと思う。

「ベジ、ポン、ラダさん。まあ、きみたちには呼びにくいだろうから、色で呼べばいいよ」

この世界にない言葉だから、仕方ない。ノルジスが思いついた名前をつけた三匹の竜たちも、意味はわかっていない。今さら意味を教えるのも面倒で、息子たちも名前の由来は知らない。適当につけた、と言うと銀竜のラダさんが怒るのは目に見えているので、そもそも口にできることではなかった。

「変わった……名前なのだな」

「お腹すいてたからね」

「は？」

まさかお腹が極限に空いているときに逢ったからそんな名前になった、とは言えない。まあ言ったとしても意味は通じないだろうけれども。

「なんでもない。ああそうだ、この子たち親子だから」
「はっ？」
「ベジが……黒竜が娘ね。お父さんが白竜、お母さんが銀竜だから」
「……。まるであなた方の逆であるような親子竜だな」
「あは。僕が黒いからね」

面白いこと言うなぁ、というか、ノルジスもそれは一度思ったことだ。

「黒竜と銀竜が雌で、白竜が雄か」

フェリトワはまじまじと竜たちを眺め、触りたそうにしていたが、銀竜が発した冷気に伸ばした手を引っ込めていた。

「ところで王子サマ」
「ん、ああ、そうだった」
「うん。朝も早くから、なにかな？」

朝食を終えたところで部屋に現われたフェリトワは、今日はツヴァイのほかにも騎士を従えていた。おそらく近衛騎士で、そして竜騎士でもあろう者たちだ。服装は昨日と仕様が変わらず、動きやすそうな恰好ではあるが、一目で高貴な生まれであることがわかる。無駄な装飾がないぶん空色の双眸が際立って、さらさらと流れる薄茶色の髪も同じくらい目立っていた。

フェリトワみたいにレヴンもきらきらすればいいのに、と残念な息子を思う。セヴンはきらきらさせているからいいけれども、レヴンのほうは相変わらず全体が黒で統一されているから可愛くない。やはり、どんな服でも着たら白くなる魔術を施しておいたほうがいいかもしれない。

と、思考が反れた。寝不足だから仕方ない。いろいろと考えると、

どうも残念な息子たちの姿が気になってくるのだ。可愛い子どもたちのことだから許して欲しい。

「と、いうわけだ。かまわないか？」

いつのまにかフェリトワの説明が終わっていた。

「ああごめん、聞いてなかった」

「……。おい」

「うんごめん」

わお、とノルジスは笑って誤魔化す。穏やかで読書が好きそうな朗らかな雰囲気があるフェリトワだが、やはり魔導師団を統率する司令官なだけあって、凄みはある。

「移動するがかまわないか、と訊いた」

「ふぅん。もともと城を目指してたから、べつにかまわないけど。なんで？」

「ここから二つ先にある街で、魔獣の群れを確認したからだ。少し前に魔術師の小隊が霊術師と向かったが、おそらく手に負えない。数が多いらしい。今朝早く、応援要請がきた」

「ああ……魔が増加傾向にあるんだったね」

「だから、さっそくあなた方にも任務についてもらう」

「僕を数に入れるのはおかしいよ。息子たちに言うべきだ」

「承知している。だが……あなたは黙っていられるのか？」

フェリトワの真っ直ぐな双眸と、その奥に光る得体の知れないものに、ノルジスは唇を歪めた。

「なにそれ」

なにが言いたいのだ。けっきょくは魔王だろうとでも、言いたいのだろうか。いや、言いたいのだろう。魔を統べる王として、増加傾向にある魔に、黙っていられるわけがないと思っているのだろう。

「魔の増加傾向に、心当たりはないのか？」
「あると思う？」
「思う」
「なぜ」
「あなたがここにいる。トーエイの森から出て、われわれに姿を見せた魔王だ」

ふん、とノルジスは鼻で笑う。

「ないから表に出てきたんだけどね」
「……心当たりがない？」
「僕はきみたちが言うところの魔を統べる王だろうけどね、その役割は君たちが思っているようなことではないんだよ」

わかるだろうか。いや、わからない。だから人間は魔王を恐怖の対象とし、倒そうとする。
そのことに対して、ノルジスは思う。
なぜ、と。
なにが怖いの、と。
なにがきみたちを恐れさせるの、と。
ノルジスはなにもしないのに、魔王はただ存在しているだけなのに、そのためだけに存在しているのに。

はあ、と長く息を吐き出し、大きく息を吸い込んだ。

「息子たちを連れて行くといい。僕は残るよ」
「……あくまで、黙っている、と？」
「僕が魔王であると、知っているのは今きみが引きつれている者たちだけだろう？」
「そうだが……それが？」
「忌み子の災厄」

じっと、フェリトワを見つめる。息を呑んだフェリトワは、見つめてくるノルジスの視線から逃れることもできず、沈黙した。

「糾弾されるのは、きっときみだよ。だから息子たちを連れて行くといい」

ノルジスは魔王で、そして見てくれは忌み子だ。隠そうと思えば隠せるけれども、ノルジスにその気はない。忌み子であるなど、ノルジスには関係ない。だが、この外見のせいで誰かが傷つくのはいやだ。息子たちが悲しむのはいやだ。自分勝手なことかもしれないが、いやなものに対して平然としていられるほど、ノルジスの神経は太くもなければ細くもない。
忌み子は、忌み子らしく、隠れている。

「僕を数に入れてはいけないよ、王子」

魔王を味方につけることができたと、フェリトワは一瞬でも思ったことだろう。だが、そんなに簡単に、利用されてやるつもりはない。そもそも、魔王はフェリトワが考えているような、人間たちが思っているような、そんな存在ではないのだ。利用など、できるわけがない。

「……それでも、あなたは魔術師だ」

「僕を人間扱いしてくれてありがとう」
「そういう意味では」
「息子たちを」

ノルジスも連れて行こうと諦めないフェリトワに、ノルジスは深く笑む。

「世界に愛されし子を、連れて行きなさい」

行かない、ということを貫くと、フェリトワは少しの間押し黙ってなにか言いたそうな顔をしたが、どれだけ経っても笑みを崩さないノルジスに、説得しても無駄だと漸く理解を見せた。

「レヴン、セヴン、準備が整い次第、門の前に。竜での移動となるが……きみたちにわれわれの竜は必要ないな」
「そうだね」
「トーエイの森の魔術師どの……ノルジス、と呼んでも？」

息子たちに指示を出したのち、フェリトワが改めて、まるでこれが最後の頼みだとばかりに見つめてくる。

「僕のことは好きに呼ぶといい。なにかな」
「この砦はわたしが拠点にしている場所でもある。自由に歩き回ってかまわない。が、その外見だ。砦の奥にあるわたしの城に移動してもらえるだろうか。しばらくは客人として迎えようと思う」
「僕を客人？」
「ああ。レヴンとセヴンには、魔術師団の宿舎に部屋が与えられる。だがあなたには与えられない。住む場所が見つかるまでは、わたしの城にいてくれてかまわない」

それはつまり、監視するということだろうか。いや、きっとそうなのだろう。息子たちがいやそうな顔をしていた。

「おれたちに師団の宿舎に入れって？　いやだよ。おれたちはノルジスと一緒にいる」

「ならばその実力をわれわれに見せつけ、わたしに優遇されるようにすればいい。わたし付きの魔術師となれば、多少の自由がある。ただし、わたし付きになれば、常にわたしと行動してもらうことになる」

「……ノルジスと一緒にいられる？」

「ああ」

「なら、おれたちに家をちょうだい。そこでノルジスと暮らすから」

「わたしが用意していいのか？」

「そのほうが王子サマにとって都合がいいんじゃないの」

ノルジスを監視するなら、それなりの行動を取ろう。セヴンの遠回しなその言い方に、フェリトワは唇を歪めた。

「わたしにそんな態度を取るのは、おまえたちくらいだな」

「べつに怖くないからね」

「怖くない？」

「あんたたちはおれたちより弱いもの。そのぶん面倒臭いけどね」

大きな態度のセヴンに、一瞬だけ呆けたフェリトワは、しかし次には軽く笑った。

「おまえたちを敵に回したくはないな」

「そう思うなら、おれたちを従わせる餌を常に用意しておくことだね」

「……ノルジス、か」

「そう。おれたちの大事なひと、護ってくれないと殺すよ？」

遠慮ないセヴンの物騒な言葉に、フェリトワの後ろに控えていた騎士たちが一斉に警戒する。ツヴァイも例外なく、表情を強張らせていた。

剣を握りかけた騎士たちを、フェリトワがやんわりと牽制する。

「心しておく」

告げたフェリトワに騎士たちが俄かに動揺したが、あるじの言葉は絶対だ。一見すれば不審者、だがその身は魔術師、ともすれば自分たちを殺しにかかるかもしれない者の存在を、あるじは認めた。従う者として、自身がどう思おうと、忠誠を誓うあるじの言葉は重みがある。

ここは少しフォローしておくかな、とノルジスは苦笑した。

「僕のことは、空気だと思っていればいい」

「……空気？」

「この子たちが吸う空気、そしてきみたちを通り過ぎる空気、それが僕だ。空気は、自然に必要となるものだろう？」

ノルジスの些細なフォローは、しかしフェリトワを護る騎士たちには通じない。それでも、ノルジスがなにもする気がないことは理解したようだ。

「僕はこの子たちのそばにいるだけだよ」

ただそばに在ることを認め、息子たちがそばにいることが当然だと、そう思えば問題はないだろう。ノルジスになにもなければ、レヴンもセヴンもなにもしないのだ。

「ここに、わたしのもとに、在ってくれるか」
「この子たちの気が済むまでは、いるしかないね」

もともと居場所なんてものはない。安らげる場所なんてない。ノルジスにとって、レヴンとセヴンは救いであり希望だ。今この肩で羽を休めている竜たちの存在と同じように、レヴンとセヴンがこの世界への救いと希望を持っている。だからどこにも行かない。どこにも、行けない。息子たちの自由にさせ、邪魔をしないのはそれだけの理由だった。

「僕からこの子たちを取り上げないで」

ノルジスが望むのは、あの日あのときから、それだけである。

09 ： 変わらないこの世界。

フェリトワの城は、城というよりも邸だった。砦の奥に設けられた敷地に、ひっそりと静かに佇む洋館、ノルジスはそんな印象を抱いたが、実際に邸内は静寂が保たれていた。使用人が、家宰だという初老の男と、砦の騎士たちにも食事を提供する料理人、掃除や洗濯を任されている女官ふたり、小さい庭とついでに畑を任されている庭師の、十にも満たない数しかいないのだ。状態と地理的にも、静かなのは当然だった。

ノルジスに与えられた一室はそんな邸の二階奥、時間を持て余すだろうという配慮からか隣の書庫を自由にできる部屋で、日当たりもいい場所だ。随分と優遇されることになるらしい。

「ノルジスさま、お食事はどうなさいますか？」

家宰、つまり執事の男性は、名前をルイン・ローゼンと言って、フェリトワが幼い頃からそばにいるという。なんでもひとりでできてしまうから、ルインがいれば本当は使用人などほかに必要にならない、とフェリトワは言っていた。だから、なにか用があればすべてルインに言うようにと、ノルジスは言われている。

「僕に食事は要らないよ。あと、この見てくれだから、執事さんもあまり僕には近づかないほうがいい。部屋に籠っているから、お風呂のことだけお願いするよ」

「それはいけません。あるじから、ノルジスさまをくれぐれも頼む

と、おおせつかっております」
「うん。だから、お風呂だけお願い。二日に一回は湯に浸かりたくてね。無理なら水をここに運んでくれるだけでいい」
「それだけ、というのは……申し訳ございません、わたくしめが納得できません。どうぞ、わたくしにお世話を任せてくださいませんか」

フェリトワはルインにだけ、ノルジスの詳細な説明をしたらしい。だから、ルインはノルジスが忌み子の扱いをされる魔王だと、承知している。それでもこの態度というのは、フェリトワへの忠誠心が本物だということだ。随分といい人である。こんな人と一番に出逢えていたら、もしかしたらノルジスの今は変わっていたかもしれない。

「……僕、人間は嫌いなんだけどなぁ」
「はい？」
「でも、好きだな。人間に絶望したぶん、気楽になったからかな」

ノルジスは基本的に人間が嫌いだ。関わりたくない。けれども、優しくされると簡単に絆される。簡単に懐柔してくる人間がいるから、嫌いなのについ気を許してしまう。だから人間が嫌いなのだ。
ルインみたいな人は嫌いではない。その視界にはフェリトワが絶対的に入っていて、フェリトワの言葉だけがルインの唯一だからだ。

「食事は、本当に要らないよ、執事さん」
「ですが」
「怖くて食べられないんだ」
「なんと……怖い、ですか？」
「以前、毒を盛られたことがあってね。死ぬくらい苦しい思いをしたのに死ねなくて……それ以来、セヴンかレヴンが作ってくれたも

のしか食べられなくなったんだよ。だから食事は気にしないでいい。本当に、食べられないから」

ノルジスは苦笑する。

偏食、と言ったほうがまだ聞こえはいいかもしれない。ノルジスの場合、そもそも食べものを認識できなかった。息子たちが持ってきたものを、作ったものを見て、漸く食べるものだという認識ができるのだ。そうなった理由は過去、人間が嫌いになったきっかけでもある。

「随分と、苦労されたのですね」

「ああいや、それは忌み子の意味とか、わかってなかった無知が招いたものだから」

「ノルジスさまは、お姿だけが忌み子であると、伺いました」

「だとしても、人は外見で判断する。誰かが忌み子だと言ったのなら、忌み子になってしまうんだよ」

「そうでしょうか？　わたくしはそう思いません」

「執事さんは王子にそっくりだね」

「殿下はわたくしの誇りです。お褒めの言葉、ありがたく頂戴いたします」

律儀に頭を下げるルインは、だからフェリトワが信頼するのだなと、窺うことができる人柄だ。ノルジスにとって「執事とはこうあって欲しい」という理想にも、ルインは当て嵌まる。

だからなおのこと接し易いのかな、と思いながら、ノルジスはにこにこと笑みを浮かべた。

「お風呂、お願いするね」

「承知しました。それから、食事に関しては諦めます。ですが、果物などはいかがでしょう？」

「果物か……手を加えられていない状態でなら、食べられるかもしれないな」
「でしたら、いつでもお召しになれるようご用意させていただきます」
「しばらくお世話になるね」
「はい、お任せくださいませ」

再び律儀に頭をさげたルインは、では沐浴と食事の準備をいたします、と言って部屋を出て行った。
ノルジスはひとりになって、正確にはその肩にまだ銀竜はいたが、ほっと息をついた。
これからどうなるのだろう、なんて久しぶりに思いながら、高く上った太陽に照らされた外を眺める。
あんまり変わってないなぁとつくづく思っていたが、本当にこの世界はあまり変わらない。文明の発達は緩やかで、この数十年で漸く電気が普及し、根づいた。乗りものは竜がいるせいか、未だ馬車が主な移動手段で、たまに竜を移動手段にすることもある。竜騎士以外にも竜を手懐けることができる者がいるから、そういった者たちが竜を移動手段にする商売をしているのだ。だから乗りものの発達は非常に遅い。

「あとは……ガスは危険物扱いだったか。使えるのに勿体ない。まあ、活用方法がある、ということを知っているだけで、その方法自体は知らないからね……無くても困らないけど、あったら便利だろうなぁ」

ひとり言に、銀竜が「ふんふん」と頷いてくれているが、ノルジスはその艶やかな鱗を撫でるだけで頷きは聞いていない。完全にひとりで呟いている。

「石油とかあるのかな……いや、あったか。石炭はあったな。魔術が使えると便利だから、気にしたことなかったなぁ……はは、僕ってばすっかりこの世界の住人、いや魔王か。まさか自分が物語の役を得ることになるなんて……考えて生きてなかったなぁ」

それはもう遠い過去、遠い記憶、遠い昔だ。忘れてしまったこともあれば、憶えていることもある。久しぶりに思い出しているのは、きっと十数年ぶりにあの森を出たからだろう。そして、またあの森にノルジスはきっと戻る。あの、始まりの場所へ。

「随分と長く、生きてるなぁ……」

ふう、と力を抜いて椅子にもたれる。体勢が変わると銀竜も肩の座り心地が悪くなったようで、ノルジスの膝に降りてきた。

「ラダさん、僕、久しぶりに森を出たよ」

ノルジスの語りかけに、そうね、と返事がくる。

「世界は変わらないね。ラダさんはどう思う？」

変わらないわ。わたしが生まれてから、ずっと、この世界はこの世界のままよ。

銀竜が苦笑した。ノルジスも一緒に苦笑する。

「そっか……魔術とか霊術があるから、そんなに発達しないのかもね」

ノルジスが生まれた世界は、違ったのかしら。

「そうだよ。僕らはただの人だった。非力な人間だと思う。けれど、力はあった。戦争する力があった。たくさんの人を殺す力だった」

それは魔術かしら、霊術かしら。

「そういう力はないんだ。この世界は魔術とか霊術とかあって、便利だよね。だから僕らはいろいろなものを手ずから作っていたよ。とはいえ、僕は町工場で部品を作っていただけだけどね」

竜との会話は、ノルジスは声に出すが、竜の声は直接脳に響いてくるような音だ。聞こえるというよりも、感じるといったほうが正しいのかもしれない。銀竜の声は、ノルジスの耳には、心には、とても優しく穏やかに入ってきた。

それをしばらく楽しんでから、隣の書庫を覗いてみる。読んだことのある本もあったが、ほとんどは目にしたこともない内容の本ばかりで、どうやらしばらく楽しめそうだ。ただ、フェリトワの書庫であるから、大半が専門書みたいな本である。趣味で集められたのだろう創作小説は、天上まで届く全面の棚のうち極僅かで、これはすぐに読み終わってしまいそうだ。

「まあでも、これだけあれば、レヴンとセヴンが帰ってくるまでは楽しめるかな」

ノルジスは棚から一冊取りだすと、窓際にある椅子に腰かけ、膝に丸くなった銀竜を撫でながら本の世界に入り込んだ。それは僅かな時間のつもりだったが、銀竜に呼ばれてハッと顔を上げたときにはいつのまにか部屋に明かり灯されていたから、どんなときでも本に没頭できる便利な自分に少し笑った。

「果物を用意させていただきました。あちらに置いておきましたので、どうぞお召し上がりください。それから沐浴ですが、向かいにございます部屋が浴室にございます。毎日この時間に用意させていただきますので、ご承知くださいませ」
「ありがとう、執事さん」
「いいえ。では、わたくしはこれで下がらせていただきます。なにかございましたら、そこにあります鈴でお呼びください」

ルインが用意してくれた果物は、林檎や葡萄といった、ノルジスがわりと食べられるものだった。だが、それでもやはりノルジスの目は食べものという認識をせず、ただ美しい置きものと捉える。

「ラダさん、あれ食べていいからね」

ルインには悪いが食べる気になれなくて、銀竜に食べてと差し出した。今日一日そうであったように、銀竜はノルジスのそばを離れる気がないようなので、遠慮なく小さな身体で卓に座り、両手で果物を持って食べ始めた。

小さな身体に果物が大きく見えて、なんだか愛らしいなと笑いながら、ノルジスはお風呂をいただく。二日に一度でいいと言ったのだが、ルインは毎日用意してくれると言っていたから、明日も風呂には入れるらしい。毎日お風呂に入れるなんて、かなり久しぶりだ。贅沢なことだと思うが、好意は素直に受け取ることにする。お風呂は好きだ。ただ、眠気が増すから身体的には少しつらい。長湯はせず、ノルジスはお風呂を上がった。

「あれ、服が……」

水気を取っているときに気づいたが、今まで身につけていた衣類

が消えていた。代わりに見たことのない衣類が籠の中に収められている。おそらくルインの仕業だろう。たぶん洗濯してくれるのだ。

「なんか、申し訳ないなぁ」

至れり尽くせりなんて、初めてだ。ちょっと困ってしまう。こういうときはどうしたらいいのだろう。しかもルインが用意してくれたらしい衣類は寝間着で、ゆったりとした上下に、ガウンのような上着、どちらも質がいい。いったいいつのまに用意したのか、サイズまでちょうどいい。

「ここまでしてもらわなくてもいいんだけどね」

どちらかというと放置でかまわないのだが、そこはルインの許せるところではないのかもしれない。さすが王子の邸を護る執事だ。

「とりあえず、頼んでおこうかな」

せっかく客人として扱われるのだ。ルインには客人の扱いをしてもらおう。そう決めて、その日は終わった。

１０　：　この嘆きのもとへ。

ルインに世話をされる日々が三日を過ぎると、空の騒がしさに気が取られるようになった。

「いかがなされました？」

ルインに誘われてお茶を、やはり誰かにやってもらうのはどうも身体が受けつけないので、それをルインに納得してもらうために自分で一から淹れて飲んでいたときだった。空を見上げてじっとして動かなくなったノルジスに、ノルジスのお茶の淹れ方が興味深いと観察していたルインが、きょとんと首を傾げる。

「……執事さん」

「はい」

ノルジスは視線を、空からルインへと移動させた。

「あなたに、この声は聞こえる？」

「声……で、ございますか？」

耳を澄ませばほら、聞こえてくる。

瞼を閉じるとほら、聞こえてくる。

「たくさんの嘆きの声……喜びの声……入り混じったたくさんの声

が」

森を出たからか、遮るものがなくて、ノルジスの耳にはたくさんの声が届く。昨日くらいからその声は聞こえ始め、今では意識しなくても大音量で脳に響いてくる。

ルインには聞こえないようだ。

「ラダさん、お願いできるかな」

本当は、ただ黙っていることなんて、できないとわかっていた。

「ノルジスさま？　どちらへ」

「ちょっと、行ってくるね」

ノルジスは窓を開けると、銀竜を外に促した。身体の大きさを自由に操れる銀竜は、外に解放されたとたんに巨大化し、ルインを硬直させる。

「この嘆きのもとへ」

窓から躍り出る。

「の…っ…ノルジスさま！」

われに返ったルインに呼ばれたが、そのときにはもう銀竜が飛び出したノルジスを背に受け止めている。

「もうすぐ王子が帰ってくるよ。準備しておいたほうがいい。きっと、傷だらけだから」

「そ……そんなまさか」

「心が、ね」

窓から身を乗り出しているルインに手を振って、ノルジスは銀竜とともに空へと舞い上がる。雨が降り出しそうだ。いや、もう降り始めているかもしれない。

「ラダさん、遠慮なくどうぞ」

銀竜に、魔術を施す。速度を調整できる魔術だ。ぐんと速度が上がり、あっというまにフェリトワの城も騎士の砦も小さくなり遠くなる。

そこへ辿り着くのに、時間はかからなかった。

「昔、世界に絶望したひとりの魔女がいた」

「！　の、ノルジス？」

「魔女は言った。この世界に復讐してやる。この世界を滅ぼしてやる。この世界を、魔に溢れた摩界に変えてやる……魔女がなにに絶望したかはわからない。けれども魔女が復讐を誓ったその日から、世界は魔で溢れるようになった」

「創成記、か？」

「やあ王子サマ」

「……今さらか」

ノルジスは、緑竜の背にいるフェリトワに、暢気に声をかける。状況を見ず、空気を読まず、また唐突に現われたノルジスに、フェリトワは半ば呆れている様子だ。

「創成記の序説を詠唱とは……なんの魔術だ」

「違うよ。ただ口ずさんでいただけ。なんとなく語りたくなって」

「……。いったいどういう理屈でここに現われた。行かない、と言ったのはあなたのほうだが？」

フェリトワは剣を片手に、随分と薄汚れた恰好で、そばには近衛騎士も置いていなかった。

「きみを助けに来たんだよ、王子サマ」

「わたしを？」

「近衛とか竜騎士とか、どうしちゃったの？」

なぜひとりなのだ、とわざと問う。フェリトワの眉間に皺ができた。

「この状況で、よくそんなことを口にできるな」

見えていないのか、と言われ、ノルジスは笑いながら肩を竦めた。

「見えているよ。だから僕が来たでしょ」

「なにしに来た」

「きみを助けに」

「わたしに助けなど要らない」

強気なフェリトワは、しかしその顔色が悪い。

ノルジスは視線をあちこちに流して、息子たちの姿を探した。黒い竜と、白い竜、それぞれあるじを乗せているだろうなと、半ば睨むような見方だったが、さして時間をかけることもなく姿を確認する。

「手古摺るわけだよ」

「なんだと？」

「なんであの子たちを一緒にしないの？」
「彼らの希望だ」
「なるほど……ね」

レヴンとセヴンは、どうやら別々に行動している。それならこの状況もわかる。
あの子たちは遊んでいるのだろうか。
首を傾げながら、ノルジスはあちらとそちらにいる息子たちを見やり、どうしようもないね、と苦笑した。

「憂さ晴らしがしたかったのかい、セヴン、レヴン」

傷つく彼らを見て、この気持ちがわかるかと、言いたかったのかもしれない。

「彼らの力があっても、この状況を覆すことができない……なぜだ。あのふたりほどの魔術師は、わたしでも見たことがないというのに」

ノルジスの視線と、その問いから、フェリトワは状況の不利に対する疑問を言ってくる。僕に言われてもなぁ、と思いながらも、とりあえず「仕方ないよ」とだけ言っておく。

「仕方ない、だと？」
「あの子たちは、ふたりでひとりだ。ひとりずつでは砦で見せたような力はない。そうだね……まあこのままでも、おそらくはちゃんと最後に片をつけるかな」
「手を抜いているというのか」
「いいや。状況を見てどう動くべきかきちんと判断しているよ。だってほら、死者が出ていない」
「それは……だが、もはや怪我人だらけで、いつこちらが押し負け

るか」
「それはないよ。ただ……きみ、あの子たちを怒らせるようなことしなかったかい？」
ノルジスは唇を歪め、この状況に苦戦している様子のフェリトワに首を傾げる。フェリトワは問いにしばらく悩んでいたが、心当たりがあるのか、小さな声で「まさか」と呟く。
「まさか？　なんだ、怒らせたのかい」
「いや、だが……相手にしていなかったぞ？」
「誰がなにを言ったのかな」
「クルスゾアが……ああ、魔術師のひとりだが、そのクルスゾアがやけに絡んでいた。声はわたしにまで届かなかったが、相手にもせずクルスゾアがひとりで喚いているように見えたから、放っておいたのだ」
「ふぅん……まあ、十中八九それだろうね」
「本当は怒っていたと？」
「言われたことにもよる。そのとき相手にしてなかったなら、かなりムカついてたんじゃないかな」
「言い返しもしなかったのに、か？」
そんなものだ、と思う。本人を目の前に、絡まれたからといって仕返しをするほど、息子たちは優しくない。だから、やられたらやり返す。返し方は、息子たち独特の方法だ。
「あれが仕返しだよ」
ノルジスは眼下を指差す。怪我人を多く輩出しているが、死者は出していない、魔との攻防戦だ。

「……どういうことだ」

意味がわからない、とフェリトワは眉間の皺を増やした。

「あの子たちの戦い方を、きちんと見てみなさい。どうやって魔の相手をしているかな？」

ちゃんと見ろ、と促す。

レヴンもセヴンも、魔獣だけを、相手にしている。それはつまり、魔術師を頼っている騎士たち、強い力を持つレヴンとセヴンにさまざまな思惑をぶつけている魔術師や霊術師たちを、一切無視した行動である。自分勝手に行動している、と言ったほうが早い。

「なんだ、あの戦い方……なぜ連携を取らないのだ」

「怒っているからだよ」

「クルスゾアの言葉に、か？」

「どちらかというと、人間に、かな。あの子たちに、魔術師だとか騎士だとか、そういう人間に対しての区別はないからね。その魔術師が人間なら、人間、という一つの括りにする。あの子たちの見方はそう」

「……あまりにも大き過ぎる区切りだ」

「僕が人間を嫌っているからね」

「嫌い？」

「基本的に僕は人間が嫌い」

「……まるで己れが人間ではないような言い方だ」

「だって僕は、きみたちが言うところの魔王だからね」

フェリトワが複雑そうな顔をした。もう聞きたくもないフレーズなのかもしれない。だが、だからこそ言う。ノルジスは魔王だ。

「……この状況、どうすればいい」

予想していなかったわけではないが、フェリトワから意外にも早い白旗が揚がった。それくらい息子たちに期待し、頼っていたのだろう。機嫌を取るとは、この王子も魔術師にはかなり苦労させられているようだ。この国の王が魔術師に興味がないのも、なんだか頷ける。

「きみ、随分と人材に恵まれてないみたいね」
「わたしも嫌われているからな」
「おや」

これまた意外な発言が出た。いやしかし、王子という身分にありながらこんな最前線で、それも己れも剣を握って戦いに身を投じているくらいだから、王子としてのその待遇は少し考えるところがある。おまけに今は、王子の身辺を護る者すらいない。いるにはいるが、魔の相手をすることで手いっぱいで、王子のところに辿りつけない状態だ。

「……なんだかきみが哀れに思えてきたよ」
「哀れ？　わたしにはこれが当たり前だ。哀れと思うなら、この状況をどうにかして欲しいな」

恨めしそうな視線をもらった。
まあ確かに、息子たちが腹いせに力を抜いているせいで、この戦況がある。わが子のフォローはせねばならないだろう。

「あの執事さんは『いい人』だったからね……まあ王子も『いい人』だというのは、あの竜騎士さんを見ていてわかったし、本人からも感じられた」

「？　ルインとツヴァイがどうかしたか？」
「僕は『いい人』に絆され易いんだ。もともと人間だからね」
「さっぱり意味が……人間は嫌いなのだろう？」
「嫌いだよ。でも好き。一度でも人間に絶望すればわかる」
「絶望……？」
「その言葉の通り、人間に対して望みを絶つ。だいぶ楽になるよ」

にこ、と笑って、ノルジスは銀竜の上に立つ。バランスは悪くなるが、銀竜がそれくらいで不安定になることはない。

「気になったときのまま出てきちゃったから、今の僕すごく目立つなぁ……ラダさん、どうしようか」

身を隠せる便利な外套はない。きらきらしている息子たち、とくにレヴンには怒るけれども、自分は常に着用している真っ黒の衣服が、真っ黒の髪と瞳とで相乗効果を得、曇り空にポツンと黒い影を作っている。

銀竜は、かっこいいわよ、と言ってくれた。

「執事さんが洗濯してくれたから、身綺麗だしねぇ」

薄汚れているわけではないから、なおさらノルジスの姿は異様に目立つことだろう。

けれども、まあいいか、と思う。

「王子サマ」
「……、なんだ」
「今の僕、魔王っぽい？」
「は？」

予想外な問いだったのだろう。フェリトワは間抜けた顔をしていた。

「せっかくの美形が台無しだよ、王子。こういうときは、嫌そうな顔をしないと」

「……いや、だが」

「魔王っぽいことしてあげるから、とりあえず、嫌そうな顔したら？」

魔王であっても魔術師だとノルジスのことを言うなら、そういう態度を取ってもらわなければ困る。

というのは建前で、フェリトワの反応は新鮮というか心地いい。なにを当たり前なことを言っているのだ、という顔をされるのは、なぜか安心する。

「いいかい王子、僕は今からあの中に行ってくるから、治まったら僕を回収するんだよ？」

「回収？」

「僕はずっと眠ることを抑えている。つまり寝不足だ。力を使ったら倒れること間違いなし」

フェリトワが変な顔を取り戻した。

「本当に魔王なのか？」

「きみたち人間がそうだという力を見せてあげる。まあ僕としては、なんでこの力が魔王と結びつくのか不思議だけれど……あの力が魔王だというなら、人間の目は随分と歪んでいるなぁと思うよ」

「……人間の目が、歪んでいる？」

「解釈はきみに任せる。じゃあ、僕はおそらく倒れるから、回収よ

ろしくね」
「は……あ、おい、ノルジス！」
ノルジスは微妙なバランスを保って、銀竜に魔獣の群れの中心まで運んでもらう。フェリトワが追いかけようとしていたが、それよりも前に軍勢に突っ込んだ。
そうして、銀竜が躊躇いもなく、その背からノルジスを落とした。
「ノルジスっ！」
フェリトワの叫ぶ声が聞こえた。銀竜から真っ逆さまに落ちたのだから、驚くのは当然だろう。
だがしかし、落ちたノルジスの身体は重力を無視する。
真っ直ぐと地面を見つめた。
「楽しそうだね、悲しそうだね、きみたち……今度はなぜ暴れているのかな」
にこり、と微笑みを浮かべ、力を、解放する。
「ああそう、レヴンとセヴンが遠慮なく相手をしているからか。消されちゃうのに、暢気だね……ああでも、きみたちは消されたいんだね」
両腕を広げると、魔獣たちがノルジスの存在に気づいた。多くの視線を感じたとき、それぞれの感情が一気に流れ込んできて、一瞬だがパニックを起こしそうになる。
「うーん……この瞬間がいつもキツイね」

流れ込んでくる感情を、こぼしてしまわないように、胸に抱き込む。苦しいが仕方ない。これが魔の痛みで、苦しみで、悲しみで、喜びだ。

おいで、おいで、と誘う。

「僕のところへおいで」

呟いた瞬間、ノルジスの双眸は銀色に輝く。とたんに、魔獣たち一匹一匹の足許に、黒くて丸い陣が浮かんだ。

「おいで」

黒い陣が、魔獣たちを呑みこんでいく。

緩やかに、急速に、魔獣は黒い陣に呑み込まれていく。

「……おかえり」

黒い陣が魔獣たちを完全に呑み込むと、黒い陣は砂のごとくちりちりと消えて行った。

同時にノルジスのほうは、急速に襲ってくる強い眠気に耐えきれず、瞼をきつく閉じた。眩暈が激しい。身体が重い。胸が苦しい。手足の感覚が遠のいて行く。

どさりと、重力を無視して降下していた身体が、地面についたとたんに横たわった。

「ノぉールっ！」

「ノルジス！」

セヴンとレヴンの重なった声、それからフェリトワの声を聞いた。

「ばか息子…っ…きみたちのせいだ」

最後に恨み言を息子たちにぶつけてから、深い闇の底へとノルジスの意識は奪われた。

11：語らせてはいけない。

さようなら、という声が聞こえる。
その声を聞きたくなくて、両手で耳を塞いだ。

「……起きたね、ノルジス」

暗闇から逃れるように瞼を開けると、すぐにレヴンもセヴンも気づいて、顔を覗きこませてくる。息子たちの長い髪が頬を擽ったので、そろそろ切ってあげようかな、と暢気に思う。

「髪、切ろうか」
「うん、ノルジスもね」
「僕も？　そんなに長く……なってるね」

身体を起こすと、さらりと自分の黒髪が流れる。いつのまにか前髪がいくらか長くなっていた。目にかかるかかからないか、という長さを保っていたのに、気づけば頬より下に前髪が長い。襟足も肩より下に長くなっていた。

「……だいぶ眠ったね、僕」
「起きないかと思った」

するりと首に、息子たちが懐いてくる。声に力がないと思ったら、どうやら心配をかけたせいらしい。

「どれくらい眠ってたのかな」
「半年」
「……。え」

吃驚した。自分でも、驚いた。

「そんなに眠ったのか……久しぶりに長かったなぁ」
「うん。いつもなら一週間くらいなのに、すごく……すごく、長かった」

怖かったよ、とセヴンが、寂しかったよ、とレヴンが、小動物のように小さく震えながらしがみついてくる。このときばかりは素直に息子たちが可愛かった。いや、起きがけのときは、いつも息子たちが可愛く見える。眠ったノルジスが、今度はいつ目覚めてくれるのかと不安になるから、目覚めたときはとにかく安心するらしい。

ふだんより何倍もおとなしい息子たちは、一頻り懐いたあとは、ノルジスに食事を用意した。たらふく食べさせられて、また眠気が襲ってきそうだったが、欠伸が出たくらいで本格的な眠気はこなかった。長く眠ったぶん、今回はしばらく起きていられそうだ。

「ここは？」
「砦の奥にある王子の城。城っていうか、邸だね」
「家をもらわなかったの？」
「もらったよ。でも、この砦の中。つまりこの部屋と、おれたちの部屋」
「ああ、なるほど。上手いなぁ、あの王子サマ」

家をちょうだい、と言ったセヴンに、フェリトワも考えたものだ。ノルジスと一緒にいられるなら、という息子たちに、ならここに住

めばいいとでも言ったのだろう。自由にしていいと言われれば、この邸の住み心地はいいから、まあ問題はない。それに、息子たちを魔術師として優遇するなら、自分の近くに置いていたほうがなにかと都合もいいはずだ。

「憶えてるんだね」
「ん？」
「眠る前になにがあったか。大抵は忘れちゃうのに」
「ああ……強烈だったからね」

フェリトワやツヴァイの印象が、ルインという執事の印象が、とりあえず記憶に残るくらいには強くある。
あとは、意識を手放す前に抱きこんだ、魔の感情。

「きみたちが楽しそうにするから、魔も楽しそうにしちゃって……取り込むことになる僕の身にもなって欲しいね」
「ノルジスが来るなんて聞いてなかった」

むう、としかめっ面をしたセヴンは、かなりご立腹だ。レヴンも、表情はないが同じような空気を身にまとっている。

「ノルジス。なんでおれとセヴンに任せてくれなかったの？」
「きみたちが遊んでいたからでしょ。声がうるさくて気になって仕方なかったんだよ」
「遊んでいたわけじゃない」
「そうそう、きみたちは怒っていたね。誰だっけ？　魔術師のひとりに、絡まれたらしいけど」
「まだ絡んでくる。あれ、殺してもいい？」
「やめなさい。せっかくのお給料が消えるよ」

むう、とレヴンも漸く表情が出る。
息子たちに心配をかけ過ぎたっぽいな、とノルジスは肩を竦めた。
「あれからどれくらい、魔を狩ったの？」
「そんなには。面倒だから、もうとにかく消しまくった」
「消しまくったって……」
「だってノルジス起きないし」
「あー……それは不測の事態。僕もまさか、半年も眠るとは……うん、久しぶりだ」

寝台から出られない脚に、情けなさで顔が引き攣る。立って歩くには、少し時間がかかりそうだ。

「だいじょぶ？」
「身体に異常はないよ。いつも通り、足が萎えてるってことくらいかな」
「そう……よかった」

歩く練習しないとね、と言う息子たちの言葉に、そうだねと頷く。とりあえず空腹感も癒え、眠気ともおさらばしたので、休憩したら歩く練習をしなければならない。感覚を取り戻せば回復は早いので、明日中には歩けるようになるだろう。こういうところは人間っぽいなぁと思う。

「魔は、そんなにたくさんいたのかい？」
「たくさんというか……レヴン、どう思う？」

魔の増加について、セヴンは判断をレヴンに委ねたが、セヴンがそうするくらいにはレヴンも判断に困っていた。

「間隔を置かずに現われては、いた、かな」
「毎日ってわけではないんだよね」
「ああ。でも、だからといって数日置くこともなかった。それくらいの頻度で現われて、話が通じそうなくらい格のある魔も、それほどいなかったね」

息子たちの判断に、はて、とノルジスは首を傾げる。
魔は、増えもしなければ減りもしない。常に一定の数がこの世界には存在する。
そう、聞いたのに。

「こんな前代未聞なこと、起こって欲しくなかったなぁ……僕、もともとこの世界の住人じゃないのに……難しいことしてくれるねぇ」

随分な無茶ぶりをしてくれる、と思ったときだった。

「この世界の、住人ではない？」

この声は、と振り向くと、どうやら開け放したままにしていたらしい扉の前に、フェリトワがいた。数人の近衛騎士と、ツヴァイもいる。

「やあ王子、ノックもなしにしかも聞き耳を立てていたとは失礼だね」

声をかけると一瞬だけ気まずそうな顔をしたフェリトワは、だが「扉が開いていたのだ」と開き直り、ツヴァイだけ連れて部屋に入ってくると扉を閉めた。

「入室を許した憶えはないんだけど」

半眼した息子たちが、暗に出て行けと文句を言う。しかし、フェリトワはノルジスが呟いた言葉が随分と気になるようで、綺麗に無視していた。ノルジスが座る寝台の横までくると、勝手に椅子に座ってしまう。

「起きたのだな、ノルジス」
「おかげさまで」
「半年も眠ったままになるとは思わなかった」
「それは自分でも吃驚。まあ、森を出てから遮るものがなかったから、そのせいかな。疲れたんでしょ」
「遮る、とは？」

目敏いな、と思いながら、とんとん、と自分の耳を指でつつく。

「声だよ。いろいろな声が聞こえるから、精神削るんだよ」
「たとえばどんな？」
「質問攻めだね……きみたちには聞こえない声だよ」
「魔？」
「だとしたら？　魔の声が僕に聞こえていたとして、なにか変わるのかい？　意味のない質問はしないほうがいい」
「己れの無知で犠牲を招くことは避けたい。だから訊く」

より多くの知識を求める、とフェリトワの空色の瞳が雄弁に語る。

「……賢明だね」
「魔の声が聞こえるのか？　彼らはなんと言っている？」
「残念ながらごちゃごちゃ聞こえるから、一つ一つは答えられないよ。感情ならわかるけどね」
「では、彼らはどんな感情を？」

「人間と一緒だよ」
「……同じ、だと？」

それは意外だ、というフェリトワの顔に、そうだろうなと思う。今までノルジスに、魔王に、魔のことについて訊ねてきた人間などいない。いや、過去を掘り起こせば数人はいただろうが、ノルジスは初めてだ。魔の詳細な説明など、この世界で説明できる人間はいない。

「魔だって、楽しいときや悲しいときがある。ほかの動物と変わらない営みを持ち、人間のように感情を理解し、けれども彼らは破壊衝動という本能から逃れることができない。魔は、そう作られている」
「……ほかの動物と変わらないというのは、なにかの本で読んだ。なぜ彼らにはその本能があるのだ？」

フェリトワからは、無知でいたくない、という素直な思いが感じられる。自国のためといえば立派だが、それは単なる知識欲のように思えた。最初に抱いた印象のとおり、この邸にある書庫の状態からも、フェリトワは学者肌なのだと思う。

「僕がきみのところへ行って、眠ったあの日」
「……。あの日が、どうした？」
「僕は創成記の序説を読み上げたね」
「ああ……あの魔女はけっきょく、ひとりの勇者に封じられる。だから今のこの世界があるとされているな」
「魔は、彼女が創り出した悲しい生きものだよ。つまり、過去の遺物だ」

少しだけ、ほんの僅かだけ、フェリトワは目を丸くして驚く。考

えればすぐわかることだろうに、思い至らなかったのだろうか。

「魔の破壊衝動は、彼女の復讐だ。だから魔はその本能から逃れられない。魔は彼女に作られた存在だからね。そして魔にほかの動物と変わらない営みがあるのは、勇者が彼女を封じた結果によるもの。その数が増えもせず減りもしないのは、彼女と勇者の戦いの名残り。ふたりの均衡が、魔の均衡と言える」

「……では、魔の増加は」

フェリトワがそれを言う前に、ノルジスは口を開く。

「ありえない」

魔の増加傾向は、封じられた魔女の復活を促すものではない。それははっきりしているのだと、ノルジスはフェリトワを真っ直ぐ見やる。

「なぜ、言いきれる。可能性がないわけでは、ないだろう」

「王子、忘れていやしないかい。僕は、なぜ魔王なの？」

問うと、フェリトワは「失念していた」とばかりに言葉を詰まっていた。

「魔を統べる王が存在するのは、なぜ？」

「……待て。そう言われると……魔王がどちらの側にいるのか、わからなくなる。魔王は魔女の？　それとも勇者か？　どういうことだ」

混乱している様子のフェリトワに、ノルジスはふっと息をつくと微笑む。

「魔王は、魔女の良心だよ」
「……なんだと？」
「だから感情がわかる。声が聞こえる。だから……消滅に導くことができる」

ふう、と肩から力を抜き、そういえばラダさんはどこに行ったのかな、とこの場には関係のないことを思って、窓から空を見上げた。眠りに入る直前にそうだったように、空は曇っている。太陽を拝みたいなぁと思った。

「魔王は彼女を殺すことができる、唯一の存在でもある。良心だからね……つまり、魔をすべて消滅させることができる、というわけだ」
「では……ノルジスがその気になれば」
「僕は二度も彼女を殺すつもりはないよ」

誰かが息を呑んだ。フェリトワだけではない。息子たちも、ノルジスの発言にひやりとしたのだと思う。

「……魔女を知って」
「王子！」

レヴンが、セヴンが、フェリトワのその問いを遮った。遮られてフェリトワは驚いている。
けれども、遅い。ノルジスは聞いた。

「そうだね……僕は彼女をよく知っている」

ぴしり、とどこかが軋んだ。

ぱきん、とどこかが割れた。
ぐらり、と視界が揺れた。
「ノルジス、喋らなくていい！」
レヴンの制止に、ノルジスはうっすらと微笑む。
「彼女を殺したのは僕だからね」
ばきんっ、と眺めていた窓が割れ、壁に亀裂が入り、壊れた木枠や硝子が辺りに散らばった。
ああ、やってしまった、と思った。起きがけは、充分に体力があるから、どうにも力加減が上手くない。
「僕が、彼女を殺した……この手で、ね」
「ノルジス！」
喋るな、とレヴンが、セヴンが、ふたりしてしがみついてくる。
とたんに力加減の方法を思い出した。
可愛い息子たちに怪我をさせるかもしれない、ということに血の気が引き、また自分は大切な存在を消そうとするのかという恐怖に襲われた。
「レヴ……っ」
「わかってる。ごめんね」
腹部に重い衝撃が走る。
レヴンの拳が、ノルジスの意識を再び闇の中へと戻した。

力なくレヴンの腕の中に倒れ込んだノルジスに青褪めながら、セヴンはそうなった原因に腹を立てた。

「よくもノルジスに喋らせたな！」

怒鳴りつけ、憤りも露わにフェリトワへ噛みつく。状況を上手く呑み込めていない様子のフェリトワは、セヴンのその勢いに一瞬だがびくりと身体を震わせていた。

「な……んの、ことだ」

「ノルジスに、喋らせた！　喋らせちゃいけなかったのに！」

「魔女のことか？　だがそれは、ノルジスが自分から……」

「だからいやなんだ！　魔のこともよくわかってないくせに、易々と語ってみせる人間が！」

ぶわりと唐突に風が舞う。足許に白い陣が浮かび、セヴンの感情に同調して蠢きを見せる。

「セヴン、落ち着け」

「うるさい！」

「だいじょうぶだよ。ノルジスは消えてない」

「消えてもおかしくなかっただろ！」

落ち着かせようとしてくるレヴンにも怒鳴った。セヴンに冷静さを求めるのは、レヴン自身も怒っているからだとその双眸が語っている。

「……なにがおまえたちを、そこまで過敏にさせている？」

セヴンの足許に浮かんだ陣は見えているだろうに、怯みもせずフェリトワは訊いてくる。ツヴァイは剣に手をかけ、いつ攻撃されてもいいように控えているというのに、暢気な王子だ。ノルジスが割った窓の音で、部屋の扉の向こうにいる近衛騎士もいつ飛び込んでくるかわからない。

「魔女は、おまえたちにとって禁句なのか」

「おれたちじゃない。ノルジスだ。彼女のことをノルジスに喋らせるな」

「……では、おまえとレヴンに訊けばいいのだな？」

どうせ訊きたいのはノルジスと魔女の関係だろう、と思っていたが、案の定フェリトワが訊いてきたのはそれだった。

「ノルジスと魔女の間に、なにがあった？　そもそも魔女は創成記の序説に書かれるほど昔に存在した者で、建国当初の千年近い過去のものだが？」

「……そんなに訊きたいの」

「先にも言った。己れの無知で犠牲を増やしたくない」

知識欲だ、と思う。フェリトワは、国を護るために魔術師をまとめ、竜騎士を率いているが、その求める知識はフェリトワ自身の欲だとセヴンは思う。魔獣狩りの任務に同行するたび、それはつくづ

く感じられたことだ。
王子という責任が、フェリトワをそうさせているのかもしれない。
とすれば、フェリトワは、ノルジスがそう判断したように「いい人」だ。
だが、それを信じていいのかわからない。フェリトワの人柄は、ノルジスが眠っていた半年間でよく観察し、害にはならないと思ったのは事実だが、それでもわからない。

セヴンが押し黙っていると、双子の兄が口を開いた。

「真実は、いつも隠されているものだよ」

その一言は、この国、アルファンデスの創成記を覆す言葉だ。

「真実、とは？」
「たとえば勇者が、たとえば魔女が、とある交渉をしていたら、どうなると思う？」
「交渉？　なにか約束を交わしたというのか」
「勇者は魔女に言った。もう一度だけ、人間を信じて欲しい。絶望しても、その望みを見失わないで欲しい。魔女は言った。では証明してみせろ」
「……そんな一文、創成記には」
「ない。だから言っただろう。真実はいつも隠されている」

レヴンの語ったことに、フェリトワは顔色を失っていた。まさかここでアルファンデスの創成記を覆されるとは、思っていなかったのだろう。
当然だ。これは、誰にも語られたことのない真実なのだ。

「魔女と勇者はどうなった……」

「勇者は魔女を封じなかった。封じたふりをした。それだけだよ」
「封じなかった？」
「魔女は、証明してみせろ、と勇者に言ったのだからね」

当然の流れだろう、と小首を傾げたレヴンは、腕に抱いたノルジスをゆっくりと寝台に横たえ、セヴンの肩をとんとんと叩いてくる。少しは落ち着いたか、ということらしいが、足許の陣は消えない。
消せないでいると、双子だからできることだが、陣をレヴンに奪われた。レヴンの足許に移動した陣は、レヴンの意思で動き、修復魔術に書き換えられる。壊れた窓や亀裂が入った壁が、緩やかに時間を戻して修復された。

「……勇者はどうやって証明してみせた。封じられなかったのなら、魔女は今でも生きて……いや」
「言うな」

フェリトワが口にしかけた言葉を、セヴンはフェリトワを睨んで遮った。だが、同じくらいの強さでフェリトワは睨んでくる。

「魔女が生きているとしたら問題だ。魔女はこの世界を恨んでいる。魔の増加は魔女が原因かもしれないのだぞ」
「それはないと、ノルジスは言っただろ」
「では魔女は？　勇者は？　どこにいるのだ」

言わせる気でいるフェリトワに、腹が立った。だが、その問いをノルジスに向けられたくなかった。

「勇者は魔女と交渉したのち、人間の生をまっとうして死んだ。国に英雄として扱われながらね」
「そこは創成記に在るとおりか……魔女は？」

腹立ちが増す。今、とてもひどい顔をしていると思う。レヴンはしらっとしているが、双子の兄はセヴンと違って表情の動きが鈍いだけで、内側ではものすごいことになっている。その感情が伝わってきて、セヴンは拳を握った。

「死んだよ、もちろん。だからもう彼女はここに存在しない」

セヴンの言葉に、フェリトワは明らかにほっとしていた。それがさらに、双子の腹立ちを膨らませる。

魔女の死を喜ぶ人間が憎い。

やはり、人間は嫌いだ。

やはり、森から出てくるのではなかった。

穏やかなあの生活を、護るべきだった。

まさかこんなことを王子に語ることになるなんて、あのときは考えてもいなかった。ただ適当に、魔術師として数年を過ごせればよかった。たくさん稼いで、しばらくはなにもしないでノルジスのそばにいられるように、できればそれでよかった。手っ取り早く稼げると思ったのが、いけなかった。

今さら後悔しても、遅いけれども。

これはなんの運命なのだろう。

「ノルジスは、なぜ魔女を知っている？」

これはなんの、運命の悪戯だろう。

ずっと、ずっと、誰にもなにも、語らなかった罰だとでもいうのだろうか。

「フランシェドール」

「……なに？」

セヴンが黙っていたら、レヴンが淡々と答えてしまった。

「フランシェドールがノルジスを遠くから呼び寄せたんだよ」

「……魔女の名？」

「そう。フランシェドール。ノルジスは、ドールって呼んでいたかな。ノルジスが前にいた世界では人形って意味になるらしくて、フランシェドールは確かに人形っぽかったからね」

だから、とレヴンは続ける。

「おれたちもドールって呼んでいたよ」

ねえ、と促される。セヴンも頷いた。

「愛称をつけられるのは嬉しいって、ドールが言ったからね。そもそもノルジスも、その名前はドールがつけたもので、愛称みたいなものだからね。ふたりしてそう呼び合うから、おれたちも自然とそう呼ぶようになった」

苛立ちを抑えるように、息を吐き出しながら言葉にする。

魔女、フランシェドールのことを口にするのは、どれくらいぶりだろう。

「おまえたちも……魔女を知っているのか？」

なにを当たり前なことを、と思う。レヴンとセヴンは、ノルジスと同じくらい生きているのだ。知らないわけがない。いや、知っていて当然だ。

「ドールはおれたちの母親だよ」
「……なんだと」
「ノルジスの妻、おれたちの母、それが魔女フランシェドール。世界に絶望し、復讐を誓い、魔を溢れさせたひとだけどね」

美しい魔女だった。
そう、ツヴァイのような赤い髪と、紅色の双眸の、とても美しいひとだった。ノルジスが黒いから、フランシェドールと並んで立つと、互いに互いを際立たせてとても鮮やかだった。

１２　：　さよならまでの物語が始まった。１

なにもかもどうでもよくなって、たぶん、どうにでもなれとすべてを投げ出していたと思う。だから、生きていようが死んでいようが、それすらもどうでもよかった。
最後の記憶は、立っている気力もなく、ああもういいやと瞼を閉じたその瞬間だ。

『のう、おんし、われの力を継いでみぬか？』

それが始まりの言葉だった。
目覚めたら、今までに見たことのない紅の髪と双眸があったのだ。

『……。どなた？』
『われは魔女だ』
『……、魔女さん？』

コスプレでもして、その役になりきっているのだろうかと、最初は思った。
けれど違った。
それはあまりにも、非現実的な事象だった。
魔女は、その場から自身が動くことなく、さっと手を振りかざしただけで料理をしてみせたのだ。美味しい食事だった。
『魔女っていうのはわかった。で、名前だよ、あんたの名前』

『名前？　皆われのことは魔女と呼ぶぞ』
『ねぇの？』
『……。いや、ある』
『魔女さんはなんてぇの？』
『フランシェドールだ。久しぶりに名乗ったのぅ』
『ふら……んん？　ごめん、もう一回』
『フランシェドールだ』

繰り返してもらったが、どうも噛みそうな名前だったから、フランシェドールと名乗った彼女をじっと見つめて、その印象が人形っぽいというだけで、ドールでいいかと思ってそう呼んだ。
フランシェドールは少し驚いていた。

『ふむ……ドール、か。よいよい。愛称をつけられるのは嬉しいものだな』
『おれは十織。神条十織』
『のぉーる？　じんす？』
『違う違う。とおる。しんじょう、とおる。ああもしかして、トオル・シンジョウ、とかのほうがわかるのか？』
『発音が難しいのぅ』

フランシェドールと同じくらい噛みそうな名前であるつもりはなかったのだが、どうにもフランシェドールには発音ができなかった。同じ言葉を話しているのに不思議だなと思いながら、聞き取れた名前でいいよと言ったら、ではわれも愛称をつけようと彼女は言った。

『ノルジスだ』
『は？　どこをどうやって、そうなった？』
『ノぉール・ジンスぅ、と聞こえるのだ。ノルジスでよかろう』
『……。まあ、いいけど。べつに拘りはねぇし』

黒眼黒髪で完全にアジア圏内にいる顔なのに、フランシェドールによってなぜか異国の人になった。いや、フランシェドールの紅色を見れば、確かに己れは異国の人ではあった。
どうせだから、このまま改名してしまおうか。新しい名前で生きるのもいい。名前には拘りもない。
そう思って、ノルジスという名を受け入れた。

そこから、魔女フランシェドールとノルジスの、さよならまでの物語が始まった。

この世界のことも、魔女と呼ばれているフランシェドールのことも、アルファンデスの創成記のことも、魔という存在のことも、ノルジスはすべてをフランシェドールから教えられた。
だから、魔王と呼ばれるようになるまで、いくらもかからなかった。

「きみはひどいね、ドール……僕にいろんな問題を突きつけるなんて」

はあ、と深々とため息をつきながら、ノルジスは光りを求めて瞼を開ける。眩しさに目を細めた。焦がれた太陽なのに、ひどく目に染みる。

「僕より先にいなくならないという約束も、きみは護らなかった……」

帰りたい、と思うようになったのは、フランシェドールが約束を破った日からのことになる。
ノルジスが魔王になることを受け入れたのは、フランシェドール

が家族をくれると言ったからだった。ノルジスに息子たちを与えてくれたフランシェドールは、しかしノルジスを置いて先に死んだ。フランシェドールもノルジスの家族になったのに、ノルジスのその手で、殺させた。

「いつ思い出しても、きみは僕にとって、ひどいひとだね」

家族をくれたフランシェドールが、自分より先にいなくなった。そのことがひどく悲しくて、ひどく寂しくて、ひどく虚しくて、この世界から消えてしまいたくなった。帰れるものなら、故郷に帰りたいと思うほどに、フランシェドールの死を受け入れられなかった。

フランシェドールを愛していた。いや、今も愛している。

だから、フランシェドールがいない世界なら、初めからいなかった世界に帰りたい。

今さら帰っても、居場所なんてないことは、わかりきっているけれども。

それでも、初めからフランシェドールという妻はいなかったのだと、苦笑して諦めることができる世界であることは確かだ。

「また暴走するようなら殴るつもりでいたけれど……だいじょうぶ？」

かけられた声に、ふと視線を移した。

レヴンとセヴンが、足許に白い陣を敷いて待機していた。

「……。きみたち、お父さんをどうするつもりですか」

殴るとかの前に、封印されそうな代物を用意されては、ノルジスも警戒してしまう。

なんて可愛くない息子たちだろう。少しくらい感傷に浸らせてく

れてもいいのに。

「だいじょうぶそうだね」

ふっと、危険な陣が消失する。

ほっとした。本気で封じられるかと思った。

「いや久しぶりにドールを思い出してドキッとしたけどね？　心構えがあればなんともないからね？　暴れたり、そんなに若くないんだから、しませんよ？」

「そう言って、思い出すたび、レヴンに殴られてると思うけど？」

「ああそうだレヴン！　きみね、お父さんひ弱なのよ、きみほど怪力じゃないのよ、その馬鹿力いい加減自覚してくれるかなっ？」

腹部に痛みを思い出して、ノルジスは寝台から身体を起こした。身体中が軋んでいる。腹が痛いと、全身が訴えてくる。腹が立つことに治療されていて、とりあえず数日もしないで治りそうなのは喜ばしい。

「ノルジスが暴れたら本気でかからないと、おれたちが死ぬ」

「僕はそこまで非情じゃないよ！」

ひどい誤解だ、と文句を言ったら、息子たちは半眼した。

「ノルジスの無意識的な攻撃って、ほんと地味に痛いんだよ。地味過ぎて気づかないこともあるんだよ。甘く見てたらいつか絶対死ぬ」

「可愛いわが子に怪我なんてさせませんよっ」

「だから攻撃が地味なんだよね……」

「そもそもわが子に攻撃なんてしません！」

少し息を切らせながら訴えた。
はあ、と息子たちは揃ってため息をついた。
「夢でドールに逢えた？」
「ほ？　ああうん、久しぶりに。出逢った頃のドールだったよ。全身真っ赤で、自分のこと魔女だって、最初はコスプレでもしてんのかと思ったなぁ……」

話題を変えられたが、フランシェドールのことを話すときはいつもこんな感じだ。
息子たちはいきなりフランシェドールの話を振ってくる。もちろんそんなときはノルジスが思い出しているときだから、フェリトワのときのように動揺して暴走しかけることはない。だが、たまにその制止がきかないこともある。
フランシェドールのことは、それくらいノルジスにとって接し方が不安定な思い出だった。

「ノルジスって、その名前、ドールがつけたんだよね？」
「そうだよ。ドールもそうだったけど、きみたちにも発音できないらしい名前だからね」
「なんて言ったっけ」
「なんだっけ……ああ、十織だ。神条十織」
「やっぱりノォールに聞こえる……ノォールじゃないの？」
「とおる、だよ。同じ言葉を喋ってるはずなのに、なんで発音できないかな？」

息子たちは声を揃えて、ノルジスの昔の名前を繰り返す。それでもやはり「とおる」とは発音できなくて、「ノォール」と口にしている。フランシェドールも、暇さえあればノルジスの昔の名前を口にする練習をしていたが、けっきょく最後まで発音できなかった。

そんなに難しい名前ではないのになぁと、いつも思ったものだ。だから、昔の名前を今でも憶えている。

「ノルジスでいいよ。というか、ノォールはほんとにやめなさい。神条十織は、もう随分と前に死んだからね」

「え？　なにそれ、どういうこと？」

「え？　って、え？　あれ？　言わなかった？」

おや、と思う。

昔の名前を捨てたことを、息子たちに話して聞かせたことがなかっただろうか。

「その話、知らない」

セヴンだけでなく、レヴンも「どういうこと？」と首を傾げていた。

話していなかったらしい。いや、訊かれることがなかったから、もしかしたら話して聞かせたことがない。フランシェドールには訊かれたので答えたが、一度その説明をしているからか、息子たちにも話して聞かせた気でいたかもしれない。

「正確には、死んだかどうかもわからないんだけどね？」

「ノルジスはドールに呼ばれて、別の世界からこの世界に来たんでしょ？」

「ドールが言うには、そうだね。ただ僕は、最後の記憶が曖昧なんだよ。力尽きて倒れたところまでは憶えてるんだけどね」

「気がついたらこっちにいたってこと？」

そう、とセヴンの問いに頷く。

「こちらの世界にはドールの魔力を受け継げる者がいなくて、それで遠くにドールは呼びかけて、僕を見つけたらしいよ」
「それはドールから聞いた」
「あ、きみたちの僕情報はドールからなのね」
「ドールはおれたちの母親だよ？」

当たり前なことを言わせるな、という顔をするセヴンに、苦笑する。

「そうだね、ドールはきみたちの母親だ」
「ノルジスが最初、ものすごく口が悪かったっていうのも聞いた」
「あー、若かったからねぇ……すごく荒れていたというか、なんというか、うん、人生がテキトーだったかな」
「ドールがやめろって言ったの？」
「いや、自分から。生まれ変わってみようかな、と思って。ドールに名前つけられたときにそう思ったから、どうせだから丸ごと変わってみようかなぁと」
「なんかそれ……ノルジスらしいね」
「だから、今の僕は神条十織ではなく、ノルジスなんだよ」

くす、と笑うと、息子たちも笑う。

「死んだって、そういうこと？」
「そういうこと。あちらの世界にいたときの最後の記憶は曖昧だし、テキトーな人生を歩んで損してたから、わからないならいっそそれまでの自分を捨ててしまおうと思ってね。新しく生まれ直したと思うことにしたわけ。おかげで順応は早かったと思うよ」
「ドールが言ってた。魔術を憶えるのだけは早かったって」
「言葉は話せたからね。魔術のおかげで文字も読めたし、困ることがまず少なかった……いや、ドールの手料理は最悪だったけどね？」

「ああそうか、ドールは魔術で料理してたね。手ずから作らせると最悪なのは、おれたちも思ったな。ねえ、レヴン」

あれだけはなによりも恐ろしい、とレヴンがげっそりした。

息子たちにも恐れられたフランシェドールの手料理は、ノルジスの舌にも拒絶反応を起こさせるものだ。だから息子たちは料理が上手い。もちろんノルジスも、フランシェドールに手ずから作らせないために、必死に憶えたものだ。今では息子たちに作ってもらうから、自分でやるのはお茶を淹れることくらいだが。

「ドールは僕にとって、いろいろと規格外な女性だったなぁ……」

「規格外？」

「口調もそうだし、態度もそうだし、なにより……あんなに優しくて温かなドールが、なぜこの世界を魔で溢れさせるほど、世界に絶望したのか……僕は今でもわからないな」

「……。おれたちは、なんとなく、わかるけど」

「わかるのっ？」

少し驚いた。

妻でもあったフランシェドールが、魔女と呼ばれていたこの世界について、ノルジスはフランシェドールの人柄から理解できない点がある。フランシェドールはノルジスと共に生きながら、最期のときまで、この世界に絶望したままだった。魔の数を制御してはいたが、魔の活動に否やを言うことはなかった。

そのフランシェドールの気持ちが、息子たちにはわかるという。

「正確に言えば、おれたちが絶望を感じたのは、人間だけどね」

と、セブンが顔を歪める。レヴンも、その無表情に僅かな不快の感情を浮かべた。

「人間はノルジスを殺そうとした。今も、殺そうとする」

それは、と思う。

あの毒殺されかけたときの、あのことだ。ノルジスが魔王と、呼ばれるようになった頃のことだ。

「ドールも同じだ……世界というより、人間に、ドールは絶望していたのだと思うよ」

苦々しく言うレヴンに、ノルジスはなんとも言えなくて、謝る言葉くらいしか思い浮かばなくて、肩を落とした。

13 ： さよならまでの物語が始まった。2

フランシェドールから魔術を教えられたばかりの頃、ノルジスは人気のない森を見渡して、もう少し街に近い場所へ引っ越さないかとフランシェドールに提案した。もちろんフランシェドールは「なぜ」と訊いてきた。べつに不便はないだろうと。もちろん不便など、魔術があれば感じない。だが、どうしても食糧の調達には街へ出なければならず、またその食糧を手にするためにはお金が必要だった。

『あんたがどうやってそーゆーの調達してっか知んねーけど、さすがにおれもいつまでもタダ飯食うわけにゃあいかんし、一応こっちのことはだいたい憶えたから、街で働いてみてもいいだろ』

『われは人間が嫌いだ』

『……。おれも人間なんだけど？』

『おんしは別よ。われの後継だからな』

『はあ……いや、べつにいんだけどさ、おれ、男だし……ヒモって性に合わねぇんだわ。働いてその分は返してぇとか、思うわけよ』

気持ちというか、そういう性格であることを理解して欲しい、とフランシェドールに頼むと、では好きにしろと言われた。

引っ越しと言っても、森の奥から手前に移動するだけで充分だ。新しい街が作られようとしていたから、なにもかも新しく始めるのだというところに興味が湧いて、森からは出なくてもよかったのだ。

トーエイという名の森で、街が近い場所で、ノルジスは生活を始

めた。

『たまには帰ってくるのだぞ』

『え？　ドールも一緒に暮らそうよ』

『われは人間が嫌いだ』

足掻きのようにドールは「人間嫌い」を理由に街のそばで暮らすことを拒否し、森の奥に帰ってしまったが、べつにそれでもかまわなかった。帰るところはドールのところしかない。懐具合がよくなったらドールのところに帰ればいいのだ。それまでは自立した生活をし、この世界の情勢というものを把握しておこうとノルジスは考えた。

だから、トーエイの森の魔術師が生まれた。

最後は、魔力に怯えた人々によって、トーエイの森の魔術師はその存在を抹消されたけれども。

かまわなかった。

ノルジスはただ、この世界の情勢を知ることさえできれば、よかった。

『ドール、いる？』

努力して力を尽くしたのに、その力を忌み嫌われ恐れられて街を追い出されたその日、ノルジスはひどく身体が重かった。

『……なにがあったのだ、ノルジス』

青褪めたフランシェドールの顔を、今でも憶えている。よく笑い、よく怒り、よく感情を動かすひとであったけれども、フランシェドールのその顔を見たのは初めてだった。

『井戸に、毒を……入れられたみたいでね』

この頃から口調を改めていたノルジスは、身体のバランスを崩して倒れる寸前のところで、フランシェドールに抱きとめられた。

『……っ、やはりわれは人間が嫌いだ！』
『うーん、僕もちょっと、苦手になったなぁ』
『軽口を叩いておる場合か！　今少し待ちや。歩けるか？』
『ここまで歩いてくるので限界。もう、無理』

街の人間に殺されかけて、苦しみもがいて、ああこのまま死ぬのかな、と思いながら数日をフランシェドールの看護で永らえた。

『どの世界でも人間は怖いなぁ……』

つくづく、思った。

『開口一番がそれかえ……だから言うただろうに。われは人間が嫌いだ』
『ドール』
『なんだ』
『僕は人間じゃないの？』
『それも言うた。おんしは、われの後継だ』
『……ドールは人間じゃないの？』
『それも言うたな。われは、魔女だ』

フランシェドールは、自身を人間ではないと肯定した。ノルジスのことも、人間ではないと肯定した。

『魔女って、なに』

『魔に魅入られた者、という定義がある。だが違う。魔力を循環できる者だ。われはそう考えている』

『僕はなに？』

『おんしは魔王。魔を統べる王たる存在、魔女の良心』

わからない、と言えたらよかったのだけれども、すでにそのとき、ノルジスは己れの役割を理解していた。存在理由を知っていた。またそれを受け入れることに、異論はなかった。

フランシェドールの言葉に、そうかと、頷く。それしか言えなかった。

『ドールのほかに、魔女はいる？』

『昔はいた。今はわれひとりだ』

『ドールだけ？』

『多くは狩られ殺され、生き延びた者は滅びの道を選んだ。だからわれひとりとなった』

『ひとり……』

『おんしを呼んだは、われと同じ存在が、もはやこの世界にはおらぬからよ』

孤独だったフランシェドールは、けれども孤独を悲しんではいなかった。それが当たり前のように、自然に淘汰されていくように、言葉にした。

『なんで僕を呼んだ？』

『おんしに、われの力を継がせるためよ』

『なぜ？』
『われは、見届けねばならぬ。それが勇みし者との約束だからな』
『なにを約束したの』
『勇みし者は言うた。人間に絶望しても、僅かな希望を捨ててくれるなと。自分の言葉を理解できるわれならば、希望があるはずだと』

過去の約束を淡々と語るフランシェドールは、その紅い双眸に、なんの希望も抱いていないように見えた。

『われは、僅かな希望とやらを、見届けねばならぬ』
『そのために、僕が必要になった？』
『今はわからぬだろうが、そのうち、わかろうよ』

その顔を今でも憶えている。
淡く微笑んだフランシェドールが、本当に僅かな、とても小さな、希望を持った目をしていた。

『……ドール』
『ん？』
『僕との約束も、憶えているかい？』
『ああ……魔術と引き換えであったな。もはや完璧か？』

にっと笑ったフランシェドールに、ノルジスも微笑んだ。

『僕に家族をちょうだい』

手を伸ばすと、フランシェドールは優しく握ってくれた。

『おんしとの約束だからな』
『ああ。僕に家族を……僕より先にいなくならない家族を、ちょう

だい』

魔王と呼ばれても仕方ない。魔王という存在はフランシェドールが願ったことだ。その願いを受け入れる、つまり魔王と呼ばれることを受け入れる代わりに、ノルジスもまたフランシェドールに願っていた。

そのために情勢を知り、世界を知り、街を知り、金銭の感覚を憶え、人間を観察した。

『しかし、酔狂なことよの』

『なにが？』

『われの後継となる代わりに、家族を寄こせとは』

苦笑するフランシェドールの手を引き、甲に口づけした。フランシェドールは擽ったそうにしていた。

『欲しいんだから仕方ない。僕はもう、置いていかれるのは御免なんだよ』

『われの存在……いや、もはやおんしもそうだが、忌み嫌われるとわかったであろうに、関係ないと言うか』

『家族さえいれば、なにがあっても、乗り越えられるものだよ』

『……そうか』

仕方ないの、と受け入れてくれたフランシェドールは、ノルジスの手の甲に、口づけの返礼をしてくれた。

それからしばらくして、銀と金の双子が生まれた。

世界に愛されし者の象徴を持ったわが子たちに、フランシェドールが一瞬だけ嫌そうな顔をしたのを憶えている。だが、愛され続ける存在だとノルジスが言うと、フランシェドールは笑って頷いてく

れた。

１４　：　さよならまでの物語が始まった。３

『人間はどういう定義でもって魔王と、僕のことをそう呼ぶのかな』

それは幾度めかの襲撃を受けたあとのこと。

『われは死んだことになっているからな』
『ねえドール、魔を減らしてみる気はないの？』
『案ぜずとも、あれは増えやせぬ。まあ、減りもせぬが。勇みし者が、そう理を作ったからな』
『理？』
『われにはよくわからぬ。ただ一つ言えるのは、魔はもはや、われの制御から離れているということよ』
『ふぅん？　なら、増やすことも減らすことも、ドールはできる？』
『できぬことはない。が、その気はないな。われが作らずとも、われの制御を離れた魔は、自己の思考で動きやる。われが手を出す必要がない』
『なるほど……』
『ただ、おんしは別だ』
『僕？』
『魔を統べる者ぞ、おんしは』
『あ、そうか。でも、ドールの力を継ぐ者でもあるよ？』
『おんしは、魔力を循環できる者だ。われと同じだが、われの力を継ぐことで、そこに新たな魔力が生ずる』
『あー……ごめん、意味がさっぱり』

『つまり新しき存在よ』
『新しい？』
『勇みし者が魔力を循環できる、ということだな』
『勇者が魔力……うん？　僕が前にいた世界でのゲームでは、勇者に魔力があるのは当然だったけれど？』
『おんしの世界ではどう捉えられていたか知らぬが、この世界では、勇みし者が持つ力は精霊力でな。精霊の力を借りる、霊術がそうだ。使える者は少ない』
『勇者が魔力を持つのは、おかしいと？』
『ああ。だが、どうやら魔術を使えるようになったな、人間たちは』

フランシェドールは、この世界で言うところの悪だった。けれどもノルジスには、フランシェドールが悪であるようには見えなかった。ただ淡々と日々を送り、見守り、眺めているだけのように思えた。

『魔術を使える人は少ない？』
『少なかろうな。もともとわれの一族のみが魔術を使えた。おそらくわが一族の血を僅かに引いた者たちが、魔術師として生計を立てているのだろう』
『魔女の血を引く者……それが魔術師になった、と』
『であろう。滅びを選んだわが一族の生き残りで、人間と交わった者もいるだろうからな』
『魔女の一族は人間ではないの？』
『さあ、どうだろうな』
『へ？』
『わが一族を人間でないと言うたは、人間よ』

人間ではないと肯定していたフランシェドールからの、それは意外な言葉だった。思わずノルジスは考え込み、では人間と同じなの

ではないかと、思考をぐるぐると動かす。

『……ドール』

『うん？』

『僕らは……いや、魔術師は、もしかして同族殺しをしている？』

『ああ』

さらりと答えられ、正直ノルジスは言葉もなかった。人間が人間を殺すことは知っている。それなら魔が魔を殺してもおかしくはない。だからこそ、言葉もなかった。

『人間とはかくも恐ろしき生きものよ……無知とは幸せだな』

『人間たちは魔が……魔術師は魔が同族だと知らない？』

『知らぬから殺すのであろう』

罪にはならないと思っているから、同族殺しができる。いや、罪だと思っていないから同族を殺めることができる。同族だと知らないのなら、殺すことに罪を感じない。

『ドール、きみはそれでいいの？　僅かとはいえ、自分の一族の血を引く者たちが、魔術師が、魔を殺している』

『無知を諌めるものがいないのでは、仕方あるまい』

『きみが教えればいい』

『ノルジス、われは人間が嫌いなのだ。同胞はいとしいが、だからといって人間の側についた同胞に、われは優しくできぬ』

『なぜ』

『われは人間が嫌いだ』

ことあるごとに、フランシェドールは強調した。人間が嫌いだと、この世界が好きではないと、だが見届ける必要があると。

そこにフランシェドールの絶望があったのかもしれない。

「ドールは人間が、好きだったよ。本当はね」

ぽそりと呟くように言ったノルジスに、話を聞いていたフェリトワが渋面を浮かべた。

「まるで文献と違う」

フェリトワの率直な感想に、ノルジスは笑う。

「当たり前だよ。ドールは勇者に封じられてはいないし、それを知っていたのはその当時の勇者だけだし、ドール自身も世界から隠れていたからね」

「そんなことが可能なのか？」

「可能だったから、僕はドールに出逢った。魔王と呼ばれるようになった。そうだろう？」

「……今まで召喚された勇者と戦っていたのは、あなたか？」

「僕とドール。ここ数百年は僕かな」

「勝利の旗を掲げて凱旋した勇者もいる」

「それは僕が休眠期に入ったから。時期が重なって、死んだように見えたのだろうね」

「休眠期？」

「ドールの力は随分と大きくて強いものでね。そこに自分の力もある。支えるのはけっこう大変なんだよ。だから、戦っている最中に眠くなって、面倒になってばったり眠ったこともある。それが勇者には死んだように見えたんでしょ」

恐る恐る、ノルジスの様子を窺いながら問いかけてくるフェリトワは、ノルジスの呆気ない説明にも言葉を選ぶほど困っていた。

「昔から魔王は存在していたが……魔女の一族だったのか？」
「たぶん。ドールより前のことは、さすがに僕もわからないな。それに、ドールは孤独であることに慣れ過ぎて、孤独である悲しみを知らなかった。ドール自身、一族がたくさんいたときの記憶がないんだ。魔王が誰かなんて、ドールにはわからなかったと思うし、僕が魔王と呼ばれるようになるまではドールが、魔女が魔王だったわけだからね」
「そう、か……魔女の一族が、魔王であるかもしれないのか」
「それしか言えないね」

歴代の魔王がどうであったかなどノルジスは知らない。気づけばノルジスは魔王と呼ばれていたし、フランシェドールからも魔王だと言われていた。そういう存在になっていた。

「誰かが魔王だと言ったのなら、それが魔王になる。ただドールは、魔王の役割は人間たちが思うところの存在ではないと、していたけどね」
「魔女は、魔王になんの役割を担わせたのだ？」
「それはきみも見ただろう」
「見た？」
「僕は、ドールを殺したんだよ？」

ぎくりとフェリトワが身体を震わせ、ノルジスを警戒する。だいじょうぶだと言い聞かせるように肩を竦めて笑ったが、フェリトワの警戒は解かれない。
仕方のないことだ。
フランシェドールの話をして、つい先日、窓を破壊し壁に亀裂を入れ、レヴンとセヴンが怒り狂ったのだから。

「僕は、魔女の良心たる魔王は、それを消滅させることができる。取り込んで、すべて、なかったことにできるんだよ」
「？　取り込んで、消滅させる？」
「そう、消滅。魔の数を減らすことができる」

魔が一定数であるのは、フランシェドールと勇者の理によるものだ。だがそれを、ノルジスは崩すことができる。魔王は魔女の良心、つまり魔の創造者の良心に従うことで、理を崩すのだ。

「減らせる……なら、増やすことも」
「いいや、それはできない。僕は良心だと、言っただろう」
「魔女は魔の創造を望まない？」
「そうだね」
「魔を溢れさせたのは魔女だが？」
「これ以上は増やす気がない、ということ。だからドールは、僕が出逢った頃には魔とほとんど関わっていなかったよ」
「では……ではなぜ、今このとき魔が増加しているのだ？」
「それは僕にも説明できないな……そもそも魔を増やすことができるのは、魔女たるドールだけだからね。僕はドールの良心だから、ドールが望まないことに力を使うことはできないし」
「もし魔女が望んだら？」
「そのときは魔を作り出せるかもしれない。やったことはないけれど。でもその場合、ドールが生きていることが前提となる。ドールがいない今、僕は魔を作れない」

理解できただろうか、とフェリトワを促すと、考え込んだフェリトワは「頭を整理させてくれ」と黙りこむ。少しだけ暇をしたが、ふとフェリトワがなにかに気づいた。

「魔女も魔王も、魔獣を増やしていないのなら……いったい誰が？」

「そこに辿りつくまでこんなに時間必要だった？」
「う……すまない」
「僕が思うに、噂の魔王、だろうね」
「件の？」
「なにかしらの力……いや、確実に魔力なんだけど、もしかしたらドール並みに魔力があるのかもしれないね」
「魔女より……あなたより上回ることは？」
「僕の魔力は霊力と魔力が混じっているようなものだから、僕以外に持つ者がいない。比較はできないよ。けど、そうだね……たとえ僕より力が上回っていたとしても、僕はドールの良心だから、相殺できると思うよ」

フェリトワの双眸が、きらりと光る。考えていることがまざまざと伝わってきて、ノルジスは笑いながら顔を引き攣らせた。

「あなたは切り札になる、ということか」
「まあ……きみがそう考えるなら、そうなるのだろうね」
「レヴンとセヴンは戦力だ。もちろんあなたも。あなたは件の魔王のことであれば、協力してくれるのだろう？」
「それは仕方ない。僕は勇者に殺されたくないからね」
「神殿が召喚した勇者には、件の魔王を追ってもらう。報告は随時わたしのところへ来るよう、指示を変えよう。魔王討伐にわたしが出る、と言えば、陛下も王太子殿下も喜んでわたしに全権を押しつけるだろうからな」
「あれ、きみってば、今まで魔王討伐の命令を受けてなかったの？」
「ああ。そもそも勇者召喚は、王太子と神殿が結託したことだ。わたしは関わっていない」
「横やり入れて平気なの？」
「わたしが王太子の指揮下に入ればいいだけだ」
「それ……なんかものすごく面倒なことになりそうな感じがするん

だけど？」

王族の問題が見えそうで見えないフェリトワの話し方に不穏を感じたが、フェリトワは笑ってそれを一蹴した。

「わたしと王太子の仲は悪くない。むしろあの城でわたしによくしてくれるのは彼女だけだ」

「ん？　王太子なのに、女の子？」

「ああ、説明していなかったか。わたしには腹違いの姉と兄がいる。先王の時代から男女公平にとなって、太子には姉が立った。兄は身体が弱く、奥の宮からほとんど出られないからな。わたしは姉の代わりになるよう育てられはしたが、生憎と政治に興味はない。本来は身体を動かしたいほうでもないが、姉たちより秀でているから、騎士団と魔術師団を任せられている。これは陛下も認めていることだ」

なんとなく、きょうだいの仲はよさそうに見えた。嫌われている、と言っていたが、それはもしかしたら彼らの周りがそうさせているのかもしれない。後継には男を、と思う者たちは多いし、片や実力主義を重んじるだろうし、王宮内はいつだって不穏な動きがあるものだ。

「ほんと、きみは苦労してそうだね」

「姉たちに比べればそうでもない」

飄々としてみせたフェリトワは、肩を竦めて笑っていた。

１４　：　さよならまでの物語が始まった。３（後書き）

本年も拙作をよろしくお願い申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4307z/

僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

2012年1月1日00時48分発行